

論 説

ナショナリズム論 ——近代主義の再考——

原 百 年

目 次

はじめに

- | | | |
|---|--------------|---------|
| 1 | イデオロギー的アプローチ | E・ケドゥーリ |
| 2 | 経済的アプローチその1 | E・ゲルナー |
| 3 | 経済的アプローチその2 | T・ネアン |
| 4 | 政治的アプローチその1 | J・ブルイリー |
| 5 | 政治的アプローチその2 | M・ヘクター |
| 6 | 近代主義の批判 | |

はじめに

ナショナリズムの研究において、最も広い支持を集めてきたのが近代主義である。そのことは、ナショナリズムに関する多くの理論が、近代化に関連する様々な要因に言及することによって組み立てられてきた、ということの意味する。近代化に関する様々な要因は、中世の伝統的（封建的）社会から、近代社会へ移行するプロセスの中で生じるものである。従って、それらの近代的要因によって生じると考えられるナショナリズムは、伝統的な前近代社会では生じ得なかった。つまり、ナショナリズムは近代においてのみ生じることができた、というのが近代主義の共通した認識である。

また、ナショナリズムがネーションを創り出すのであって、その逆ではない、ということも近代主義のほぼ共通した認識であるので、ネーションもまた、近代の産物である。ナショナリズム発生の要因として挙げられるのは、主に、コミュニケーション、イデオロギー、経済、政治などの分野における近代化である。近代主義論者は通常、どれか1つの分野における近代化を特に強調する傾向があるため（例えばE・ゲルナーの経済の近代化）、強調される分野によって、そのナショナリズム論の内容は大きくこととなる。

近代主義の先駆的研究として知られているのが、K・ドイッチュの *Nationalism and Social Communication* (K. Deutsch 1966 [1953]) である。K・ドイッチュは、ネーション形成に関するコミュニケーションの重要性を説いた。ネーションとは、集団外の人々と比べ、より効果的かつ深く、互いにコミュニケートできる人々から成る集団である (*ibid.* : 101)。ナショナリティは、根本的に、社会的コミュニケーションの有効性によって成り立っていて、そのようなコミュニケーションの有効性は、産業化や都市化、そして識字率の向上やメディアの普及によってもたらされるようになった。従って、コミュニケーションが有効に機能する限りにおいて、その領域の周辺 (periphery) に点在する少数エスニック集団はネーションに同化し、吸収されていく (*ibid.* : 140-5)。ナショナリティを共有する人々は、自分たちに関することは自分たちで決めたいと考えるようになるため、既存の国家があればそれ自体をコントロールするか、または国家の一部地域をコントロールしたいと志向するに至る。もし彼らのナショナリズムが成功して、既存の国家をコントロールできるようになると、または一部地域を分離独立させて国家を成立させれば、その国家はネーションステートとなる。このように、K・ドイッチュは、ナショナリズムとネーションの出現を、近代的コミュニケーションの発達と関係づけて説明した。し

かし、J・ブレイリーが言うように、コミュニケーションの増大は、集団間の連帯意識（ナショナリティ）を育む場合もあれば、それを阻害する場合もある（J. Breuilly 1993 [1982] : 406-7）。そのことは、アジア・アフリカだけでなく、ヨーロッパにおいても、コミュニケーションの増大があってもエスニシティの違いが際立ち、共通したナショナリティの形成が達成されないケースがあることを考えれば、明らかである⁽¹⁾。近代のコミュニケーションは、確かに大衆運動としてのナショナリズムが生じる上での必要条件ではある。しかし、近代のコミュニケーションのシステムやインフラそれ自体が、いつ、どこで、どのようなナショナリズムを生じさせるかを、説明することはできない。

K・ドイッチュの *Nationalism and Social Communication* (1953) は、多くの批判にさらされたとはいえ、近代社会とナショナリズムを結びつけて考えた点において、近代主義的研究として先駆的であった。1960年代に入ると、E・ケドゥーリやE・ゲルナーといった論者が、その内容は非常に異なる形ではあるが、近代主義の立場をもってそれぞれのナショナリズム論を提案し、その後のナショナリズム研究を活発化させていった。以下では、E・ケドゥーリ以降の近代主義ナショナリズム論を見ていくことにする。その際に、それぞれの論者を、イデオロギー、経済、政治の3つのアプローチに分類する。簡略化の弊害を認識しながらも、あえて3つのアプローチに分類するのは、理論的対立軸を明確にし、それぞれの理論の長所・短所を比較し易くするためである。イデオロギー的アプローチではE・ケドゥーリを、経済的アプローチではE・ゲルナーとT・ネアンを、そして政治的アプローチではJ・ブレイリーとM・ヘクターを例に挙げ、詳しく見ていく⁽²⁾。その上で、近代主義に共通すると思われる批判を展開していくことにする。

第1節 イデオロギー的アプローチ E・ケドゥーリ

E・ケドゥーリは、1953年からLSE（London School of Economics）で教鞭をとり始め、1965年に同校の政治学教授となった。E・ケドゥーリのナショナリズム論の独自性は、ナショナリズムをひとつの教義（doctrine）として扱う点にある。ナショナリズムは19世紀初めにドイツで創り出されたひとつの教義であり、その教義が最初ヨーロッパで、そして後にアジア・アフリカで採用された結果、ナショナリズムが世界中に広まった、とE・ケドゥーリは主張する。ところで、ナショナリズムは通常、歴史上常に存在してきた自然な原初的絆に由来する強力な感情（原初主義的アプローチ）か、近代的な社会・経済・政治的諸力に起因する現象（例えばE・ゲルナーに代表される近代主義的アプローチ）によって説明されてきた。従って、それらの説明の中では、「教義としてのナショナリズム」、という視点は、たいした重要性を持たない。一般的には、例えばコミュニズムのように、ナショナリズムには「開祖」が存在するわけでもなく、「教典」に相当するものは存在しない。確かに、近代ヨーロッパの啓蒙思想がナショナリズムにある一定の影響を与えたと考える論者は多いが、ルソーやロックといった特定の名前を挙げて、誰それがナショナリズムの開祖であるとか、何がしがナショナリズムの教典であるといった、教義としてのナショナリズム論を展開する論者は見当たらない。E・ケドゥーリは、ヨーロッパ思想史の考察を通じて、まさにそれに相当する議論を展開する点において、独自のナショナリズム論を提起しているといえる。

E・ケドゥーリによれば、ナショナリズムの教義を創り出した者、つまりナショナリズムの「開祖」に相当する者は、フィヒテに代表されるドイツのロマン主義哲学者たちであった。そして彼らの講演や著作が、「教典」

に相当する。フィヒテの有名な『ドイツ国民に告ぐ』（1807年からその翌年にかけて行われた一連の講演）は、その代表例である。それらの「教典」に共通して示されていたのは、「人類は自然の内にネーションに分かれており、それぞれのネーションは一定の特徴によって識別されうるのであるから、唯一正統な政治形態はネーションによる自治である」、という教義であった（E. Kedourie 1994 [1960] : 9）。E・ケドゥーリは、この教義の誕生こそが、ナショナリズムの由来なのだと考えた。教義としてのナショナリズムが近代ヨーロッパ思想の発展過程で生まれたものであると主張されていることから、E・ケドゥーリのナショナリズム論は、近代主義の一翼を担うものである。

E・ケドゥーリの *Nationalism* は、E・ゲルナーの *Nations and Nationalism* (1983)、B・アンダーソンの *Imagined Community* (1983)、そしてE・ホブズボームとT・レンジャー編著の *Invention of Tradition* (1983) といった近代主義を代表する古典より、20年以上前の1960年に出版された⁽³⁾。それにも関わらず、*Nationalism* が現在まで引用され続けているのは、「教義としてのナショナリズム」という考え方がオリジナリティを有しているだけでなく、未だその適用可能性を多分に秘めていることを示している。1970年に出版された *Nationalism in Asia and Africa* は、ヨーロッパ、より具体的にはドイツ発祥の教義としてのナショナリズムが、どのようにしてアジアやアフリカに伝播していったかを考察した書であるが、それはE・ケドゥーリの *Nationalism* で主張されたことを裏付ける重要な事例研究となっている。以下では、上記2冊の著書を順に詳しく見ていくことにする。

E・ケドゥーリの *Nationalism* によれば、ナショナリズムの教義は、19世紀初頭、フィヒテらドイツロマン主義者らによって創り出されたものである。しかしその教義は、ある時突然、何の脈絡もなく発明されたもので

はない。それは、ヨーロッパの伝統哲学、つまり、啓蒙思想の影響を受けていた⁽⁴⁾。ただし、ナショナリズムの教義が単に啓蒙思想の産物であると考えるのは間違いである。ナショナリズムの教義は、啓蒙思想が、抽象的な哲学的論争の中で、弁証法的発展を遂げた結果、創り出されたものである、とE・ケドゥーリは考える (*ibid.* : 9)。17世紀までのヨーロッパでは、伝統的な教会と封建国家が絶対的な権力をもって人々を支配してきたが、それらが人間の進歩の妨げになると考えた啓蒙思想家は、「自由」という概念とともに新しい政治スタイルを示した。18世紀のフランスに市民革命をもたらしたのは、そのような思想であった。ドイツ哲学者のカントは、フランス革命自体は賛美したが、その伝統的啓蒙思想における「外界（特に教会や圧政）からの自由」という自由観に欠点を見出していた。なぜなら、人間は気まぐれな外界からの影響でいつや自由を奪われるかもしれないので、そのような自由を完全な自由とは呼べないからである。そこでカントは、「自由」に関する新たな哲学的見解を示した。カントの自由論は、自律的な自己決定 (self-determination) という概念と強く結び付けられ、外界の影響を受けなくても済む、より完全な自由観を生み出した。そのカントの自由論に不完全性を見出し、修正を加えようと試みた（又は正しい解釈を試みた）のが、フィヒテらドイツロマン主義者たちであった。フィヒテらの自由論は、そのときの政治・社会的状況（特にナポレオン戦争によるフランス勢力の拡大）の中で、編み出された。ナショナリズムの教義は、ヨーロッパ思想の発展の中で、自由論をめぐる哲学的論争の結果創り出された、自由と自己決定に関する教義であった。このように考えると、ナショナリズムの教義の形成プロセスは、確かに弁証法的である。*Nationalism* が明らかにしようとしたことは、ドイツ人哲学者たちの知的論争の中で、不十分であるとか不満足であると考えられた伝統的啓蒙思想に反応あるいは対抗して、どのようにしてドイツロマン主義が形成された

か、そしてまた、カントの自由論が、フィヒテらのドイツロマン主義者らによって、どのようにして非常に異なった仕方で、あるいはまったく正反対の仕方に解釈され、ナショナリズムの教義が創り出されるに至ったか、ということである。つまり、E・ケドゥーリの *Nationalism* は、そのような弁証法のプロセスの中で、ナショナリズムの教義が創り出されたのだということをも明らかにする、ヨーロッパ思想史に関する歴史的探究の書であるといえる。

では、その内容を少し詳しく見ていくことにする。まずE・ケドゥーリが言及するのは、ヨーロッパにおける伝統的啓蒙思想が18世紀のフランス革命に与えた影響である。啓蒙主義の哲学によれば、全ての人間は生まれながらにして平等で、生命、自由、幸福を追求する「自然権」を持っている。従って、そのような個々人の集合体を統治する国家の支配者の義務とは、それらの権利を保障するような統治をおこなうことである。そしてこのような被統治者と統治者の間の権利と義務に関する関係は、「社会契約」によって規定される (*ibid.* : 10)。フランス革命の成功が意味するのは、この「新しいスタイルの政治」が、啓蒙主義の原則にのっとって具現化されたということである。『人間と市民の権利の宣言』で主張されているように、「主権の原理は本質的にネーションにある」ので、人々がもし自分たちの政治制度にもはや賛成できない場合には、彼らはそれをより満足できる別の政治制度に作り変える権利と権力を持っている、という新しい政治スタイルをフランス革命はもたらした。

E・ケドゥーリによれば、このフランス革命以降、啓蒙思想とは別の、あるひとつの思想が影響力を持つようになったという。それは、ミレニアリズム (millennialism) という思想である。ミレニアリズムは、本来、聖書の中で説かれている特殊な終末論的メシア (救済) 思想を指す。「ヨハネの黙示録」では、キリストの復活、昇天、再臨の思想が示され、救世主

キリストは再臨後、千年に渡って至福のメシア王国を支配するとされている。そして千年の終わりには、すべての者が最後の審判を受け、その後に完全なる神の国、「新しき聖都エルサレム」(New Jerusalem)が樹立されるという、「千年王国論」が説かれている。ミレニアリズムは、中世の時代、異端信仰として非難された。従って、その影響力は限られていた。だが、E・ケドゥーリによれば、フランス革命以降、ミレニアリズムはひとつの合理的な改善説(meliorism)の思想として生まれ変わり、ヨーロッパの政治思想に大きな影響を与えるようになったという。その思想は、現在の苦痛や不平等がカリスマ的指導者(超自然的な存在)の力によって、突然解消され、まったく新しい至福の世界が創出される、という政治的変革を求めるものであった。従って、フランス革命以降においてこの「政治的ミレニアリズム」を指導する者は、苦痛や不平等の根源である伝統的な社会の秩序を転覆させ、新しい至福の社会を創り出すために人々を動員しようとした(E. Kedourie 1970: 96-9)。中世では異端視されていたミレニアリズムは、E・ケドゥーリによれば、フランス革命以降、人類の進歩を示す世俗的な思想となり、ひとつの改善説として、ヨーロッパにおける政治思想の伝統として発展していったという(*ibid.*: 103)。

啓蒙思想によってもたらされた新しいスタイルの政治と政治的ミレニアリズムは、変化に対する熱烈な期待と、国家の不断の刷新を求めるような思想風土となった。このような思想風土は、封建時代には見られなかった、まったく新しいもので、フランス革命以降のヨーロッパで次第に人気を博していった。ナショナリズムの教義は、必要とあらば根本的な政治・社会変革をもってして達成されるものである。そのことを考えれば、フランス革命によって確立され普及した新しいスタイルの政治と、政治的ミレニアリズムは、ナショナリズムのような教義が成り立つ上で、必須の前提条件となるものであった、とE・ケドゥーリは考える(E. Kedourie 1960:

12-3 ; 1970 : 105)。

フランス革命以降の新しい政治のスタイルと政治的ミレニアリズムは前提条件ではあったが、ナショナリズムの教義が生まれるには、もうひとつの革命が必要とされた。それは、カントによる思想革命であった。啓蒙思想の影響を受けたフランス革命家の主張によれば、人間は、譲渡すべからざる「自然権」を持っている、とのことであった。しかし当時の啓蒙主義において最も受け入れられていた認識論 (the theory of knowledge) によれば、人間の知識や哲学といったものは、全て、感覚とその記憶によって構成されるものであった。その中で、見ることも触れることもできない、つまり、感じ取ることのできない自然の法則である自然権といったものを、感覚にたよって洞察することは不可能のように思われた。ならば、どのようにしてその自然権なるものが存在し、自由と平等と友愛が全ての個人の生まれながらの権利であると主張されるのか。カント以前の啓蒙主義者は、この問題、つまり、自由やその他の全てのものは確かに存在し、現実性があるとしても、それをどのようにして証明するかという問題、に直面していた。その問題に対し、ひとつの納得のいく答えを出したのが、カントであった。これは、当時のヨーロッパ思想における、ひとつの革命とも言えるものであった (*ibid.* : 20-1)。

カントは、「自由」というものの確実性は、精神が自律的に考え進むことによってのみ、証明することができる、と考えた (*ibid.* : 21)。従って、自由というものの確実性は、我々の精神、つまり、個々人の内なる世界に見出されるべきものであり、外なる具象の世界をどれだけ観察したところで見出すことはできない。人間が、外なる具象の世界を完全にコントロールできない以上、そこに自由というものの確実性ははい。なぜならば、外に存在する何者かが、または何らかの事象が、人々の自由をいとも簡単に奪ってしまう可能性があるからである。個々人の私生活をとってみても、

そのことは明らかである。例えば、家族が病気になったり、突然の不況で収入を失ってしまったり、といった偶発的な事象が、外なる具象の世界ではいくらでも起こりうるものであり、そこに依拠する自由は、なんとも不確実で、著しく制限されたものになってしまう。カントの自由観は、自由を外なる具象の世界に見出さないで、そのような不確実性や制限を免れている。カントの見解によれば、人間は、外なる世界ではなく、自己の内なる世界、つまり、自律的な精神の中に見出すところの道德 (the laws of morality) に自ら従うときに、自由なのである。従って、「自由である」という状態は、人間の意志が、「道德」という「内なる法則」 (inward law) によって動かされるときにのみ、得られる。道德という内なる法則は、神によって定められたものでもなければ、外なる具象の世界によって定められたものでもない。それは、精神の内部から湧き出てくる「善なる意志」 (good will) であり、自由に認識され、自由に受け入れられるものである。このように、「善なる意志」、そして「内なる法則」である道德というものは、人間の自律的な精神の中に見出され、主体的に、自由に、判定される。その道德に、自分自身の意志で従うとき、人間は自由なのだ、というのがカントの自由観であった (*ibid.* : 23-4)。このような自由観に基づけば、たとえ牢獄にしようとも、人間の自由は確実なものであった。

カントによるこの自由に関する教義は、本来倫理的なものであったが、その後、政治的な色彩を帯びていく。カントによれば、人間の目的は、自らを支配し、動く、自律的な1個の自由な存在として自分自身を規定することであった。つまり、自らの精神の内部から湧き出てくる善なる意志、すなわち道德に、自律性と自己決定をもってそれに従い、自由な存在となることであった。「善人」とは、まさに、そのように自律性と自己決定をもって道德に従う人間であった。このようなカントの哲学が政治に適用された場合、次のようになる。すなわち、「善なる政治」とは、自律性と自

己決定をもって道徳に従う政治である、ということになる。ならば「善なる政治」を行うには、自律と自己決定の原則が必要不可欠なものとなる。そして自決権の獲得というものが、政治におけるひとつの重要な目標となるに至る (*ibid.* : 30-1)。

では、そのような思想の中で、国家の役割や、個人と国家の関係をどのように考えたら良いのだろうか。カントに従えば、善き国家とは、自己決定をもって道徳に従う、自治政府によって運営される国家ということになるだろう。しかし、カントの弟子や後継者たちは、国家の役割や個人との関係を説明する上で、カントの哲学は不十分だと考えた。彼らは、そのことを認識し、カントの哲学を拡大解釈、または修正した上で、新しい諸概念に基づく体系的な国家論を展開した (*ibid.* : 32)。中でも、フィヒテの国家論は、重要であった。フィヒテは、個人の意識がそれ自身の世界を創り出し、個人の意識の中においてのみ自由の確実性と現実性は存在するとしたカント流の自由論および認識論を受け入れる一方、外なる具象の世界を含めた全体としての世界、つまり自然や万物などの空間 (space) にあるもの、そして過去・現在・未来と続く時間から成る歴史は、必然的に「普遍的意識」(a universal consciousness) の産物である、と考えた (*ibid.* : 36)。ここでいう「全体としての世界」は、個人の意識によって生起する内なる世界をも含むものであり、個人の意識同様、全てを包み込む「普遍的意識」というものは1個の「自我」(ego) である。全てはその「普遍的意識」の中で生起し、それ自らの内に全てを包含する (*ibid.* : 36)。フィヒテによれば、世界は1個の「有機的な全体」(an organic whole) であり、そのいかなる部分も、その他の全ての存在がなければ、存在することはできない。いかなる部分もそれ自体では知りえず、部分だけにに関する知識は幻想である。従って、全体こそ、唯一の現実なのである。ならば、個人の自由というものは、全体の中の部分でしかなく、それ自体では存在し

ない。個人の自由というものは、自らを全体に合一させることによって實在性を与えられる。従って、個人の完全な自由とは、全体の中へ自らを全面的に没入させることを意味する (*ibid.* : 37-8)。フィヒテに代表されるカント以降のカント派哲学者たちは、このような新しい諸理論をもって、ひとつの国家理論と、国家と個人の関係に関する理論を描き出した。すなわち、彼らにとって国家とは、自らの個別的権利を守るために集結した個人の集合体ではない。国家は、全体として存在しているのであり、個人より高いレベルの存在であり、個人に優先する。個人は、国家と一体になったときに初めて、その自由を実現するのである (*ibid.* : 38)。このような国家論は、フィヒテと同世代のドイツ人哲学者、シュリング、ミュラー、シライエルマッハーらによっても支持され、ひとつの影響のある思想になっていった。

以上見てきたように、カントと彼に続いたドイツ人哲学者たちの議論は、人間の自由に関するものであった。すなわち、カントは、人間の自由は自己決定をもって道徳に従うことによって得られる説き、それだけでは不十分だとしたフィヒテらは、人間の自由は自らを国家に没入させることによって得られると主張した。そして国家は、自己決定の原則に従い、自治政府によって運営されるとき、善き国家となった。ここに現れているのは、大体において集団の自己決定の教義であるといえるナショナリズムの教義の輪郭といえる。だが、E・ケドゥーリによれば、このような哲学思想の発展が、あとひとつの要素によって修正されることによって、ナショナリズムの教義が完成したのだという (*ibid.* : 54)。その新しい要素とは、「多様性の美点」(the excellence of diversity) という思想であり、主にヘルダーによってもたらされた。その思想によれば、人類は本来的に様々なネーションに分かれており、この多様性を重視するならば、人々は自らのネーションの独自性を、順守しかつ不可侵なものとして維持していく義務

がある、という (*ibid.* : 58)。ヘルダーの *Treatise upon the Origin of Language* (1772) から導き出される政治的理念は、ネーションの多様性を重視することに加えて、特に言語というもの重視した。なぜなら、言語は、自らのネーションの独自性を表象するもので、他のネーションとの区別を可能にする、目に見える象徴だからである。また言語は、ネーションが存在するかどうか、そして自らの国家を形成する権利を有するかどうかを判断する、最も重要な基準であるという。フィヒテらは、ヘルダーによって示されていたこの「多様性の美点」と言語の重要性を説く思想を、彼らが展開していた自由論と国家論に取り込んだ。ここに、ナショナリズムの教義が完成する。

フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』は、教義としてのナショナリズムが示された、最初の教典に相当する。その中で示されたナショナリズムの教義は、人類を別々の独自のネーションに分けて考えること、ネーションの各メンバーはそのナショナルアイデンティティに価値を見出してそれを積極的に育み、さらに自らをネーションというより大きな全体に没入させることにより目標とする自由を達成するのだということ、そして唯一正統な統治形態はネーションによる自治だということ、を主張する (*ibid.* : 73)。更に、独自のネーションとして認められる基準は、そのアイデンティティを表象する、言語である。従って、同一の言語を話す集団はネーションとして認められるので、その集団はネーションによる自治、つまりひとつの主権国家を形成するべきである、という主張がなされる。

このようにしてナショナリズムの教義がフィヒテらの手によって編み出されるのだが、E・ケドゥーリによれば、ロックやルソーらの啓蒙思想がそうであったように、それは、彼らが生きた時代の政治・社会的コンテキストの影響を受けていた。当時のドイツはプロイセンを含むドイツ諸邦に分裂しており、それぞれの絶対君主によって支配されていた。その点にお

いて、イギリスやフランスと比べて、政治・社会的な後進性を有していた。その中であって教養も知識もあるフィヒテらドイツ人哲学者およびドイツ知識人たちは、彼らに見合った職務と報酬を切望した。しかし、当時の封建的ドイツ社会の中でそれらを得ることができない上、愚かで無教養な貴族たちによって見下される立場に憤りを感じていた (*ibid.* : 43-5)。このように、上層社会からも相手にされず、かといって近代的啓蒙思想に感化された彼らが伝統的社会に戻ることもできず、彼らは社会で居場所を失い、所謂“marginal man”(疎外された人々)になっていた。彼らはアイデンティティの危機にあり、緊密で安定した共同体において、それと自己同一化することを必要としていた。彼らは、フランス革命以降に復興した改善説的ミレニアリズムに期待をかけ、苦痛や不平等の根源である封建的ドイツ社会の秩序を転覆させ、新しい至福の共同体を創り出し、その共同体と自己同一化することを切望した。新しい国家の建設がそれを可能にするものであると考えた彼らは、国家に対して過大な精神的達成の期待をかけ、前述したような、彼ら独自の国家論を編み出していった (*ibid.* : 46)。また、その国家論に言語(ドイツ語)というものが密接に関係付けられたのも、彼らの低い地位に対する憤りが、ドイツの貴族や特権階級の間で当時もてはやされていたフランス語やフランス文学に対する憤りと重なり合い、ドイツ語へのこだわりに政治的な意義が付帯されるようになったからである (*ibid.* : 60-1)。このように、ナショナリズムの教義は、フィヒテらドイツ人哲学者が生きた19世紀初頭の政治・社会的環境の中で創り上げられていったのである、とE・ケドゥーリは考える。

ナショナリズムの教義は、イタリアのマッツィーニの例に見られるように、まずはヨーロッパで広まった (*ibid.* : ch.6)。後にアジアやアフリカにナショナリズムの教義が伝播していくのだが、そのプロセスを明らかにしようと試みたのが、*Nationalism in Asia and Africa* (1970) である⁽⁵⁾。

その著書が出版された当時、アジアやアフリカのナショナリズムに関する説明で人気を博していたのは、E・ケドゥーリのそれではなく、経済に関するものであった。アジア・アフリカのナショナリズムは、資本主義ヨーロッパ諸国によって進められた帝国主義と植民地主義に対する反発であるとしたマルクス・レーニン主義的な説明や、産業化に必要な社会変革がナショナリズムを生じさせるとしたE・ゲルナーの説明が、当時は一般的に受け入れられていた (E. Kedourie 1970 : 1-23)。E・ケドゥーリは *Nationalism in Asia and Africa* の中でそれらの説明を退け、アジアやアフリカのナショナリズムは、ヨーロッパ思想に感化された当該地域の知識人が、ヨーロッパ思想を輸入し、政治的に活用した結果である、と主張した。

多くのアジア・アフリカ地域は、ヨーロッパ列強の植民地となり、当然その影響を強く受けていた。ヨーロッパ列強の軍勢力とその行政機構は、アジア・アフリカ地域の伝統的な社会が知り得なかった、はるかに強大で優れた技術と方法をもって植民地を支配した。また、それまで自給自足の経済を維持してきたアジア・アフリカの伝統的社会は、植民地支配を通じて、否応なしに世界経済システムに組み込まれるようになった。結果、アジア・アフリカの伝統社会は、その威信と秩序を急速に失っていった。そのような中で、先進的なヨーロッパの信条体系を、伝統社会のそれにとって代わるひとつの代替物として見なす人々が現れるのは、必然的な流れであった。ヨーロッパの思想は、本や新聞などの出版物によって伝えられたので、知識人で、特にヨーロッパの言語が理解できる者に伝わった。それらの知識人は、自らの社会の後進性を嘆く一方、先進的で優れたヨーロッパ思想の原理・原則に従った社会で生きることを望んだ (*ibid.* : 27)。

しかし、彼らは皆、そのヨーロッパの支配者に、ひどく幻滅させられることになる。彼ら知識人のほとんどは、ヨーロッパ統治が新たに提供した学校や大学で教育を受けるか、ヨーロッパへの留学経験を持つ者たちであ

った。しかし、彼らがどれだけ西欧化し、高い教養を身に付けたとしても、肌の色が違うというだけで、ヨーロッパ人と同等の地位を得ることはできなかった。一方、自らの伝統社会においても、西欧化した彼らに居場所はなかった。彼らは、フィヒテラドイツ知識人がそうであったように、「疎外された人々」(marginal men) となってしまった。アジア・アフリカの知識人は、教養を身に付けているにも関わらず、というよりはむしろ教育を身に付けているからこそ、自分たちが「まぬけ」(dummies) だと感じずにはいられなかった (*ibid.* : 80-83)。そして、「自分は何者なのか」と自らに問いかけずにはいられなかった。彼らもまた、アイデンティティ危機に陥り、自らを誇れる、新たなアイデンティティを模索しなければならなかった (*ibid.* : 85)。

ヨーロッパ支配下にあるアジア・アフリカの知識人、「疎外された人々」は、このアイデンティティ危機に直面し、その解決策を求めた。彼らの思考様式は、既にヨーロッパの思想によって構成されていたので、おのずとその解決策も、ヨーロッパの思想から導き出された。E・ケドゥーリによれば、彼らはまず、ヨーロッパで既に浸透していた改善説的なミレニアリズムによって、彼らの問題を解決したいと望んだという。原始キリスト教の影響を受けた洪秀全によって率いられた太平天国の革命運動は、その典型例だという (*ibid.* : 103)。

ヨーロッパに最初広まり、その後アジア・アフリカに伝播していったナショナリズムの教義は、実は、このミレニアリズムの1形態であるとE・ケドゥーリが考えていることは前述したとおりである (*ibid.* : 105)。アジア・アフリカのナショナリストたちは、ヨーロッパのナショナリストに習い、「ネーションの歴史」を創り上げ、それを賛美し、利用することによって、人々に訴えかけた。だからこそ彼らは、特に土着の神や儀式(E・ケドゥーリの言葉で言えば dark gods and their rites) を賛美し、そこか

ら湧き出てくる感情を利用して、人々を動員した。例えば、インド人ナショナリストのB・C・パル（Bipin Chandra Pal）がドクロの首輪をした女神カーリーを崇拜し、ケニア人ナショナリストのJ・ケンヤッタ（Jomo Kenyatta）が女性の割礼を賛美したのは、そのためである（*ibid.* : 76）。彼らが土着の神や儀式を賛美したのは、伝統的な人間だったからではなく、彼らが西欧教育を受けた知識人であり、ナショナリストだったからである。アジア・アフリカのナショナリズムはヨーロッパ支配への反発だととられがちだが、実は、ヨーロッパ人に習い、ナショナリズムの教義を実践した結果なのである。E・ケドゥーリの *Nationalism in Asia and Africa* は、トルコのZ・ゴカルプ（Ziya Gökalp）、T・アルプ（Tekin Alp）、インドのS・バナージャ（Surendrahath Banerjea）、B・C・パル（Bipin Chandra Pal）、エチオピアのC・A・ディオプ（Cheikh Anta Diop）、中国の孫文、日本の北一輝など、アジア・アフリカの多くのナショナリストを例に挙げ、ヨーロッパ発祥のミレニアリズム、そしてナショナリズムの教義が、どのようにしてアジア・アフリカで展開されたかを示した、独自のナショナリズム論を提供している。

第2節 経済的アプローチその1 E・ゲルナー

E・ゲルナーは、1949年からLSE（London School of Economics）で教鞭をとり、1962年に同校の教授となった。従って、先に取り上げたE・ケドゥーリとE・ゲルナーは、長年の間、LSEの同僚であった。E・ケドゥーリの *Nationalism* は多くの支持を集め、1960年代半ばには、ナショナリズムを説明する上で1つの有力なアプローチとなっていた。E・ゲルナーは、ナショナリズムは近代の産物で、ナショナリズムがネーションを創り出すと考えたE・ケドゥーリと、同じ見解を有していた。しかし、教義

としてのナショナリズムの力、そしてその教義を採用したインテリに注目し、そこにナショナリズムの由来を求めたE・ケドゥーリの見解を、E・ゲルナーは受け入れることができなかった。E・ゲルナーにとって、ナショナリズムの由来は、近代化のプロセス、具体的には産業化(industrialization)のプロセスに求められるべきものであった。両者の間にはこのような見解の違いがあり、E・ゲルナーは同僚のE・ケドゥーリの主張に触発されて、彼独自のナショナリズム論を模索するに至った(J. Breuilly 2006: 11)。そして、1964年、*Thought and Change* において、E・ゲルナーのナショナリズム論が初めて提起された⁽⁶⁾。これが、E・ゲルナーが言うところの、「LSE 論争」(the LSE debate)の始まりである(E. Gellner 1995: 61)。E・ゲルナーは、資本主義がもたらす階級闘争がナショナリズムの由来であるとするマルクス主義的見解も批判したが、最大の論敵としてターゲットにしていたのは、E・ケドゥーリであったことは間違いないだろう⁽⁷⁾。

E・ゲルナーにとって、ナショナリズムの発生は、資本主義と階級闘争、またはイデオロギーや教義の力に求めることはできず、産業化のプロセスに由来するものであった。*Thought and Change* (1964) の第7章、‘Nationalism’ は、産業化とナショナリズムの関係を簡潔に示したものであり、それを詳しく肉付けしたものが *Nations and Nationalism* (1983) であった。後に *Encounters with Nationalism* (1995)、そして *Nationalism* (1997) が出版され、若干の修正が加えられるが、基本的には *Thought and Change* に示されたナショナリズム論が原型であり、それを詳しく述べた *Nations and Nationalism* がE・ゲルナーのライフワークである。*Nations and Nationalism* は24もの言語に翻訳され、恐らく最も広く知られたナショナリズムの定義を提供している(J. Breuilly 2006: 13)。ナショナリズムとは、主として、政治的な単位とナショナルな単位

が一致するべきであると主張する、政治的原理である。感情としてのナショナリズムは、上記の政治的原理が侵害された時の怒り、または、それが実現される時の満足感として理解できる。そして運動としてのナショナリズムは、それらの感情によって駆り立てられた結果生じる、ひとつの運動として理解できる (E. Gellner : 1983 : 1)。ネーションは、ナショナリズムによって創出される。そしてナショナリズムは、産業化に由来する。これが、E・ゲルナーのナショナリズム論のエッセンスといえる。1996年の論文、‘The Coming of Nationalism and Its Interpretation’ は、そのエッセンスを凝縮した論文である。以下では、*Thought and Change* と *Nations and Nationalism* の議論を踏まえながら、その論文の内容に沿ってE・ゲルナーのナショナリズム論を見ていくことにする。

ナショナリズムは近代の現象であると主張するE・ゲルナーは、まず、前近代においてナショナリズムの発生が、その社会構造からして不可能であったことを説明する (E. Gellner 1964 : 153-4 ; 1983 : ch.3)。前近代における社会は、一般的に「農耕・識字社会」(agro-literate society)であった。その第1の特徴は、技術革新がほとんど見られないことである。もちろん、偶発的な技術革新は時折現れるが、産業社会における技術革新のような一連の発展的思考とプロセスの中で生じることはなかった。従って、農耕・識字社会の基礎である食糧生産は、一定の量を保つ傾向にあった。食料の絶対生産量がある程度限られているため、社会成員の関心は、社会的ヒエラルキーに向けられた。つまり、どれだけ効率的に、多くの食料を生産するかという問題よりも、社会的ヒエラルキーの中で、自らがどの地位にいるか、ということの方がはるかに大きな問題だった。それは、社会的地位が高く、権力があれば、それに比例して食糧の取り分が増えたからである。飢饉の時には、このことは決定的に重要となる。中央権力によって管理される食糧は、社会的ヒエラルキーのランクの高い方から順に、配

給されるからである。こうなれば、生産性を上げて中央に吸い上げられてしまうよりも、社会的地位と権力を向上させることに努めたほうが、よほど価値のあることであった（E. Gellner 1996：99-100）。

このような傾向にある農耕・識字社会には、結果として、かなり固定化された身分制度が形成された。これが2つ目の特徴である。この身分制度は、強制と同意によって、固定化された。身分制度を変更させようとする者は、当然のことながら、現行の身分制度から恩恵を受けている上層からの抵抗を受けた。それは、しばしば脅迫や暴力を伴う上層からの身分制度の強制であったが、一方で、その身分制度の思想や価値観を下層で内面化（internalize）し、それに同意する状況も存在した⁽⁸⁾。このように固定化された身分制度を形成した農耕・識字社会では、人々のアイデンティティは、そのヒエラルキー的の身分構造、つまり、それぞれの社会的身分によって定義された。

農耕・識字社会の3つ目の特徴は、識字能力が身分の違いを表すひとつの指標となっていたことである。識字能力は、継続的な教育を受けて初めて身に付くものである。前近代における農耕社会では、そのような教育を幅広い層に提供する資源もなければ、そうすべき理由もなかった。識字能力は、限られた身分の者のみが得られる（得ることを許される）ものであり、それゆえに、識字能力を有するということは、それ自体がその人物の身分の高さを表象した。また、文字言語はしばしば話し言葉とは異なる、特別な言語であった。そのため、識字能力を有する者は、神秘的で崇高な能力を有する者として扱われ、その能力を持たない一般農民との身分的区別を一層際立たせた（*ibid.*：101-2）。

結果として、農耕・識字社会は、「高文化」（high culture）と「低文化」（low culture）の、構造的な分裂によって特徴づけられる社会となった。これが4つ目の特徴である。高文化は、文書の読み書きを通じた、格式ば

った教育によって伝授され、それを共有する者の間には、横断的な規範が形成されていた。高文化を形成するのは支配階級に属する者たちであり、軍人、聖職者、行政官、そして裕福な商人によって構成されていた。一方、低文化は、文書や教育によってではなく、日常の生活習慣の中で具現化され、その土地の話し言葉（vernacular）を通じて伝授された。低文化を形成したのは概して農民層であったが、彼らが1つの大きな共同体を形成していたわけではない。なぜなら彼らは、それぞれ特有な風習や習慣を有する、小規模で閉鎖的な農村共同体をいくつも形成していたからである。文書の読み書きができない農民は、その土地の言葉でコミュニケーションを成立させたが、それは方言的な言葉であって、地域によって大きく異なった。従って、地域間のコミュニケーションは難解で、高文化のように横断的な広がりを持たなかった。その意味で、低文化は、それぞれの農村共同体による「下位低文化」（sub-low culture）によって分断されていた状態にあった（E. Gellner 1983：9-11；1996：102-3；）。

結果として、農耕・識字社会では、文化的単位と政治的単位が一致しないという状況が続く。支配者層は、被支配者層に対して文化的均質性を強要する動機がなかったし、むしろ、高文化と低文化の違いを強調し、それを根拠に身分の違いを固定化した。支配者層の関心は、被支配者層である農民から様々な搾取を安定的におこなうことであり、むしろ、身分制度と文化の違いは、必要不可欠なものであった。また、低文化が下位低文化によって分断され、ひとつの共同体を形成していないままの方が、分割統治（divide and rule）するのに好都合であった。農耕・識字社会では、文化が人々を結合させる近代的産業社会と違い、その構造からして文化の多様性が人々を分裂させていたのである。このような環境の中では、政治的な単位と文化的な単位を一致させようとするナショナリズムは必要とされず（果たすべき機能はなく）、生じることはなかった。

このように前近代についての状況を説明した後、E・ゲルナーは、なぜ近代においてナショナリズムが生じたかを説明する（E. Gellner 1964：154-7；1983：ch.3）。近代に入ると、これまで述べてきた農耕・識字社会とは根本的に異なる新しいタイプの社会が出現した。それは、産業社会である。産業社会の経済基盤とその原理は、継続的な経済成長という側面に1番のプライオリティーを置く点において、農耕・識字社会のそれと異なっていた。近代においては、経済成長を維持できない政体はその正統性を失い、最終的には転覆させられた。従って、継続的な技術革新と資源開発、そして生産の絶え間ない拡大を意図的に達成する、という経済的原理が、いかなる政体にとっても重要なこととなった（E. Gellner 1996：105）。

このような新しい経済原理とそれを支えるための経済基盤は、仕事の本質をその根本から変えた。農耕・識字社会では、仕事は、主に農業生産に関わる肉体的な労働が中心であった。一方、産業社会では、純粋な肉体労働は最小限に縮小され、複雑な機械を操作したり、生産システムの管理を中心とする労働が中心となった。また、それらの労働は、主に言語を通じて、様々な指令や意見を伝達し合うことを必要とした。つまり、産業社会では、「意味の操作」（manipulation of meaning）という能力が必要不可欠なものとなったのである。しかも、産業に従事する者すべてに、その能力が要求されるようになったのだ。そのことは、普遍的なコミュニケーションシステム（誰もが理解できる言語システム、および文化的コミュニケーションシステム）の必要性が生じたことを意味する。産業に従事する者は皆、互いに顔を知らない遠く離れた者同士であっても、あいまいさを残さずに、メッセージのやりとりができる必要がある。もはや、地方言語特有の表現方法や、地方でのみ通用した文脈は、産業社会の要求に応えることができなくなった。産業化は、普遍的で、標準化された、文脈に頼らないコミュニケーション言語、および意味システム（文化）を必要とし、それ

を人々全員に習得することを要求するようになったのである。つまり、人々全員に、同じ言語と文化を共有することを要求するようになったのだ（E. Gellner 1964 : 155-7 ; 1983 : ch.3）。

産業化に伴い人材の流動性が増したことも、言語と文化が標準化されなければならない理由のひとつになった。経済成長を続けるには、技術革新とそれに伴う職業体系のダイナミックな転換を必要とした。新しい産業が成長するには、適材適所の原則が必要で、官僚も含め、硬直した職業体系は適さない。しかも、高度な技術が必要とされる産業では特に、能力主義に基づいた人事が必要になってくる。そうした場合、人材の流動性は増す傾向になり、その流動性を確保することは、産業の発展にとって不可欠なものとなる。この人材の流動性は、人々の間で、標準化された言語と文化が共有されることを要求する。なぜなら、先にも述べたように、どの仕事に就いたとしても、意味の操作が必要となってくるからである。また、この人材の流動性は、必然的に社会を平等主義（egalitarian）に変える。なぜなら、ヒエラルキー的身分制度は人材の流動性を妨げるため、解体され、人々に平等な機会が与えられる能力主義がそれにとって代わるからである。確かに、能力主義によって経済的な格差は生じるかもしれないが、それは本来固定化されたものではなく、機会均等という意味で人々は平等である。この平等主義は、人々が、標準化された言語と文化を共有することを促進する。なぜなら、人々はもはや身分によって分断されることはなく、同じ言語と文化を共有することが是とされるからである（E. Gellner 1996 : 108-9）。

これまで述べてきたような産業社会は、言語と文化が均質になることを可能にするだけでなく、それを要求するのである。そして要求されるのは、均質な言語と高文化である。この要求に応えることができたのは、普遍的な、標準化された学校教育のみであった。しかしそのような普遍性を前提

にした学校教育は、その規模から言って、莫大なコストがかかるはずである。そのコストを負担できるのは、公的機関、具体的には国家だけである。また、産業社会が求める学校教育を監督し、保護できるのも国家だけである。従って、言語と文化を均質にするのも、その均質化された言語と文化を保護するのも、国家のみができることである。その場合、均質化された言語と文化を創りだし、それらを守る唯一の方法は、自らの国家を有することである。ここから、ひとつの文化にひとつの国家、または、ひとつの国家にひとつの文化、ということを主張する政治原理、つまり、ナショナリズムが必要となってくる (E. Gellner 1964 : 158-160 ; 1996 : 109-10)。ここで言う「文化」とは、当然「高文化」のことであり、それには文字言語を含む。

このように、産業化は、あるひとつの国家の領域内に均質な高文化を普及させる機能を持つナショナリズムを必要とする。これが、近代世界にナショナリズムが生じた理由である、と E・ゲルナーは考える⁽⁹⁾。ところが、その均質な高文化を普及させようとするナショナリズムは、一方で、既存の国家から分離独立 (secede) する形態のナショナリズムを生じさせる。その原因は、産業化の広がり不均等 (uneven) なことに由来する。例えば、ある地域で産業化が進み、ナショナリズムが生じたとする。これはひとつのナショナルステートを誕生させようとする運動であり、ある領域 (国家) 内に均質な高文化を普及させようとする。だが、その領域 (国家) の境界内に、まだ産業化の波が訪れていない後進的な地域があるとすると。後進地域出身の人々は、産業化がもたらすはずの経済的恩恵を受けられない集団である。もしその集団が、産業化が進んだ地域の言語や文化を共有しているなら、彼らが分離独立的ナショナリズムに向かうことはない。なぜなら、彼らは都市部 (中心部) の高文化に同化できたからである。しかし、もし同化への障害 (E・ゲルナーの言葉で言えば、エントロピーへ

の障害)となるような、言語、肌の色、宗教、そして文化習慣などの違いがある場合、その後進集団は分離独立ナショナリズムに向かう傾向が強くなる。なぜなら、先進地域の核となる集団メンバーが、それらの違いを理由に、仕事、住居、学校などへのアクセスを制限しようとするからである。ある者は、それらの違いに理解を示し、協調するが、他の者、特に労働市場の各層で厳しい競争にさらされている者は、後進地域からやって来た人々を「やっかい」で「異質な集団」として敵意を露にする。結局、後進地域出身のインテリやエリートは、その「違い」を逆手に取り、それを自ら強調し、政治的自治を得るための運動（ナショナリズム運動）の根拠として利用するようになる。政治的自治が得られれば、後進地域のインテリやエリートは、その新たな政治的境界線の中で、ほぼ自動的に高い社会ポストが得られるだろう。また、一般民衆に関しても、彼ら自身の言語や文化によって教育システムや産業社会が建設されることは、大きな希望とモチベーションをもたらすだろう。このようにして、エリートと民衆は手を取り合い、分離独立的ナショナリズムへと傾倒していくのだという (E. Gellner 1964 : 164-171 ; 1983 : ch.5)。

E・ゲルナーによるナショナリズム論の骨子は、以上のとおりである。それは、マルクス主義者によるナショナリズムの解釈を否定するのに十分な論点を提供しているように思われた⁽¹⁰⁾。E・ゲルナーにとってナショナリズムは、階級的単位と政治的単位ではなく、文化的単位と政治的単位を一致させようとする政治的原理および運動だからである。もし階級が大きな役割を果たすとしたら、それは階級が文化と一致した時だけである。確かにE・ゲルナーのナショナリズム論は、近代における経済活動と深い関わりを持つ点において、マルクス主義と共通する。しかし、近代に生きる人々のアイデンティティを、階級にではなく、文化と結びつけた点において、また、資本主義と分業にではなく、産業と高文化の創出に視点を置

いた点において、E・ゲルナーの理論とマルクス主義のそれは異なる。

E・ゲルナーが主なターゲットにしていたのは、前述したとおり、E・ケドゥーリのナショナリズム論であった。E・ケドゥーリによれば、ナショナリズムは、19世紀初頭、ヨーロッパ（ドイツ）において発明された教義である（E. Kedourie 1994 [1960] : 1）。その教義の発明がナショナリズムの由来であるならば、ナショナリズムの発生は、偶然的（contingent）なものである。つまり、その発生は、何か普遍的な要因に由来するものではなく、ある特定の哲学者（フィヒテらドイツロマン主義者）によって、ある特別な社会環境の中で、偶然に発明された、ということを意味する。E・ゲルナーはそのような解釈を受け入れない。もし、カントの自由論が現れなかったら、そしてフィヒテらによってナショナリズムの教義が創り上げられなかったら、ナショナリズムが生じることはなかったのか、とE・ゲルナーは問いかける（E. Gellner 1964 : 151）。E・ゲルナーにとってナショナリズムは、近代において生じる、半ば必然的で、普遍的な現象である。フィヒテらが何の教義を生み出そうが、または生み出さまいが、産業化の波がおとずれた所にナショナリズムは生じるのだ（必ずしもそのナショナリズムが成功するとは限らないが）。E・ゲルナーの *Thought and Change* (1964) の第7章 ‘Nationalism’ は、E・ケドゥーリの *Nationalism* (1960) を多分に意識して書かれたものであることは間違いない。また、*Nations and Nationalism* (1983) にしても、E・ケドゥーリ批判を展開するために、第9章 ‘Nationalism and Ideology’ を設けている。このことは、E・ケドゥーリのナショナリズム論がいかに大きな影響力を発揮していたかを示すものである。E・ゲルナーは、そのE・ケドゥーリのナショナリズム論だけでなく、マルクス主義者、および原初主義者の解釈をも完全に否定しうる、エポックメイキングなナショナリズム論を提案したと言えよう⁽¹¹⁾。

第3節 経済的アプローチその2 T・ネアン

T・ネアンは、E・ゲルナー同様、近代経済との関わりの中でナショナリズムという現象を捉えた。ただし、E・ゲルナーが産業化の果たした役割に注目したのに対し、T・ネアンは資本主義の果たした役割に注目した点で、両者は異なる。T・ネアンは、古典的マルクス主義を内省的に批判しながら、史的唯物主義（historical materialism）の立場をとる、所謂ネオマルクス主義者である。T・ネアンが、「ナショナリズムの理論は、マルクス主義の大きな歴史的失敗を露にする」と宣言したのは、古典的マルクス主義が、ナショナリズムという現象を満足いくかたちで説明できないことを認めたからに他ならない（T. Narin 2003 [1977] : 317）。T・ネアンのナショナリズム論は、彼自身も認めているとおり、E・ゲルナーの *Thought and Change* に多く負っている（*ibid.* : 85）。ただし、人類史における近代資本主義の発展とそれにとまなう唯物主義が、ナショナリズムの由来であると主張するその点において、T・ネアンはマルクス主義の伝統を受け継いでいるのであり、「ネオマルクス主義者」による1つの独立した理論として検討されるべきものである。T・ネアンのナショナリズム論のエッセンスが凝縮されているのは、*The Break up of Britain* の第2章、‘Scotland and Europe’、および第9章の‘The Modern Janus’である。以下では、その2つの章に基づいて、T・ネアンのナショナリズム論を見ていくことにする。

T・ネアンのナショナリズム論は、E・ゲルナーのそれ同様、構造主義的な分析手法を用いる。E・ゲルナーは、ある領域（帝国や国家）内における産業化が、封建的社会構造を崩壊させる一方、経済成長を維持できるような近代的社会構造（流動性と高文化に特徴づけられる社会構造）を出

現させ、それによってなかば必然的にナショナリズムが生じたと論じた。T・ネアンは、1領域内ではなく、世界における資本主義の展開が、ある特徴的な社会構造を世界中にもたらし、それによってなかば必然的に世界中にナショナリズムを生じさせた、と論じる。「個々の木を理解するには、森全体を見る必要がある」というT・ネアンにとって、世界を覆う資本主義経済システムがその「森」であり、個々のナショナリズムはその森によって創りだされる構造によって説明される (*ibid.*: 320)。では、ある特徴的な社会構造とはどのようなものなのか。それは、「不均等な発展」(uneven development) によって創りだされる社会構造である (*ibid.*: 329)。

近代における資本主義の発展は、18世紀のイギリスに始まり、まもなく、フランス、オランダ、スウェーデン、スペイン、ポルトガルなどの西欧、そしてアメリカがそれに続いた。このような資本主義の発展は、啓蒙思想の自由主義および普遍主義の実践にその多くを負ったが、その思想に基づけば、資本主義がもたらす物質的文明と大衆文化は、均等に、他の周辺地域(periphery)に拡散していくはずであった。つまり、周辺地域は西欧とアメリカの経済発展にそのまま続き、いずれ追いつき、均等な発展を成し遂げるだろう、と考えられたのである。この均等化のプロセスは、均質な、啓蒙された階級が周辺地域に台頭し、コスモポリタンな精神をもって彼らによって進められるはずであった。しかし実際は、そのような普遍的な階級は形成されなかったし、均等化のプロセスは生じなかった。むしろ、イギリスやフランスなどのブルジョワ階級は、啓蒙思想と自由主義経済の理想を煙幕として使い、進出する先々で強欲な物質的利益を追求したため、それら資本主義先進国の周辺地域への進出は、支配的、かつ侵略的な帝国主義となったのである。結果として、資本と物質的利益は資本主義先進国によって吸い上げられ、周辺地域が追いつき、均等な発展を遂げることは

なかった。従って、世界資本主義システムは、資本主義先進国と周辺地域諸国との間に、必然的に、格差構造をもたらしたのである (*ibid.* : 325-6)。

周辺地域（西欧およびアメリカ以外の地域）は、構造的に、いわば後進地域（backward region）になってしまった。だが、後進地域のエリートは、先進諸国のブルジョワと同じように、資本を蓄積し、物質的利益を享受したいと願っていた。従って後進地域のエリートは、先進諸国の資本主義経済を模倣し、それを彼らの土地に根づかせなければならなかった。そのためには、工場、学校、そしてそれらを統率する彼ら自身の政府が必要であった。しかも、それらの事業は、先進諸国に干渉されずに進めなければならなかった。なぜなら、先進諸国は今や帝国・植民地主義（imperial colonialism）となり、常に資本と物質利益の独占を狙っていたからである。だから、後進地域のエリートは、彼ら自身のために、彼ら自身のやり方で、経済発展の事業を進めなければならなかった。しかし「彼ら自身のやり方」で進めるということは、彼ら自身の、土着の伝統と人々に頼らなければならないことを意味した。なぜならそれが、彼らが唯一利用できる資源だったからである。この前向きな発展に向けた思いと運動は健全なものである、とT・ネアンは言う。しかし、土着の伝統と人々に頼らなければならないことが、彼らの思想と運動を必然的にエスニズム（ethnicism）に向かわせ、しばしば病的で不合理な、神秘主義的後退に至らせるのだ、とも言う。T・ネアンが「ナショナリズムはヤヌス（前と後ろに顔をもつローマ神）のようである」と言うのは、まさにナショナリズムのこのような両面性（健全性と病理性）を認めるからである (*ibid.* : 336)。

彼ら後進地域のエリートは、「歴史的な近道」、つまり経済発展への近道をするために、社会全体を動員しなければならなかった。この意図的な社会的動員は、帝国・植民地主義に対抗して、彼ら独自のアイデンティティ

を意識させるような、階級横断的で、しばしば好戦的な共同体を創り上げることを目指した。後進地域にあったのは、伝統的なエスニシティや言語、そしてフォークロアや独自の風貌（肌の色や顔立ちなど）だけであった。ナショナリズムは、集団間の違いを強調してこそ生じえるものである。後進地域のエリートは、それらの「違い」を織り交ぜながら、彼らのナショナリティとナショナルヒストリーを「再発見」または「創出」し、それに訴えかけることによって、民衆を動員しようとした。資本主義の力によって帝国・植民地主義と不均等な発展が世界中に広まると、あちこちの後進地域で、このようにしてエリートが民衆を動員するナショナリズムが生じ、1つの歴史的な潮流となった。そして今でも、その歴史的潮流にピリオドは打たれていない。ナショナリズムは、世界が資本主義システムを採用することの、社会・歴史的な代価なのである、とT・ネアンは言う (*ibid.* : 327-9)。

つまるところ、T・ネアンのナショナリズム論は、「反帝国主義理論」(anti-imperialist theory) であると言える。E・ゲルナーが「産業化の不均等な広まり」(uneven diffusion of industrialization) に分離的ナショナリズムの由来を求めたことに、T・ネアンがヒントを得ていたことは彼も認めるところである (*ibid.* : 84-5)。しかし、それをマルクス主義的に解釈し、世界資本主義システムと不均等な発展がもたらす格差構造に由来する、反帝国主義ナショナリズムの理論を組み立てたことは、T・ネアン独自の功績であった。T・ネアンにとって、世界で最初のナショナリズムは、資本主義先進国であった西欧諸国ではなく、その周辺地域に位置する19世紀初頭のドイツやイタリアで生じたものである。イングランド、フランス、そしてアメリカでは、元来、ナショナリズムが発動される必要はなかった。なぜなら、それらの国々は、資本主義先進国であり、ナショナリズムの本質である「反帝国主義」を掲げる必要がなかったからである。そ

これらの資本主義先進国自身が帝国なのであり、周辺地域の反帝国主義ナショナリズムの挑戦を受ける立場にあったのだ。周辺地域であるドイツやイタリアに端を発するナショナリズムが1つの潮流になり、19世紀後半にドイツ、イタリア、日本が新興国として急速に台頭してくると、西欧およびアメリカはそのナショナリズムの煽りを受けた。西欧およびアメリカは、自らのカウンターナショナリズムを発動することによって、新興国の挑戦に対抗した。このようにしてナショナリズムは、資本主義先進国とそれに追いつこうとする新興国との間の、1つのスタンダードとなった。世界資本主義システムは、帝国主義と植民地主義を通じて全世界に不均等な発展をもたらし、全世界にナショナリズムを生じさせた。世界資本主義システムは、構造的にナショナリズムの発生を不可避なものとしたのだ。各国、各地域は、自らのナショナリズムを展開するか、他のナショナリズムに屈し、1つの地方州と化すか、どちらかの選択をしなければならなくなったのだ、とT・ネアンは言う (*ibid.* : 106 ; 329-32)

古典的マルクス主義によれば、歴史を動かすモーターは階級であり、ナショナリティは単に、陰謀的指導者によって扇動される、一時的に現れる現象として理解された。従って、ナショナリティが階級を凌ぐはずはなかった。しかし歴史はこの見解が明らかに間違いであることを証明し続けている。反帝国主義の闘争における人々の動員において、ナショナリティの求心力は、階級のそれをはるかに凌ぎ続けているのである。この点について、T・ネアンは、社会主義の誕生が時期尚早であり、まったく機が熟していなかったと考える (*ibid.* : 340)。T・ネアンのナショナリズム論は、このような反省の中から、マルクス主義のエッセンスである歴史的唯物主義に立脚して考え出されたものである。帝国主義に反抗し、不均等な経済発展と不均等な物質利益の享受を是正するために発動されるナショナリズムは、確かに歴史的唯物主義による解釈を可能にする。同時にナショナリ

ズムは、階級闘争が与えることのできなかった、何か現実的で重要なものを大衆に与えた。それは、大衆文化である。合理的なマルクス主義によってどれだけ非難されようとも、文化は人々にとって、より近づきやすく、現実性を持つものである。ナショナリズムがその文化を供給する機能を果たすなら、ナショナリズムおよびナショナリティが「誤った意識」(false consciousness)である、とたたづけてしまうことはできない、とT・ネアンは言う。近代化の中で、階級闘争ではなくナショナリズムが台頭したのは、人々がそれだけ文化というものに対して価値を見出し、ナショナリズムがそれを供給する機能を果たすからである、とT・ネアンは言う(*ibid.*: 342)。このように、T・ネアンのナショナリズム論は、ナショナリズムは人々が必要とする文化を供給する機能を果たすのだ、という機能主義(functionalism)の立場もとる。しかし、全体的には、世界資本主義システムがもたらす不均衡な発展に由来する、経済的な格差構造というものを強調する、システム論および構造主義的アプローチを採用するナショナリズム論を展開している。

第4節 政治的アプローチその1 J・ブレイリー

1982年に *Nationalism and the State* を出版して以来、J・ブレイリーはナショナリズムの政治的側面を強調する代表的な論者として扱われてきた⁽¹²⁾。その著書の中で、ナショナリズムは政治運動の一形態として理解される。そして、その政治運動としてのナショナリズムを類型化し、その類型に当てはめながら、複数の歴史的ケースを比較分析する、という手法をとる。約30にも及ぶ国や地域のナショナリズムをケースとして取り上げ、かつ詳細な歴史的比較分析を行っている点から、*Nationalism and the State* は、ナショナリズムに関する分析枠組みを示すだけでなく、非常に

多くの情報が満載された書となっている。その根本的な主張は、ナショナリズムという現象を、近代国家および近代国家システムの文脈の中で生じる、特有の政治運動として理解すべきである、というものである (J. Breuilly 1993 [1982]: 1)。その上で J・ブルイリーは、ナショナリズムとは、国家権力の獲得を目指し、またはそれを行行使し、そのような行動をナショナリストの主張によって正当化する、政治運動である、と定義する。「ナショナリストの主張」(a nationalist argument) は、以下の3つの主張の上に構築される、1つの政治的教義である。まず、ネーションは、明白で独自な特徴をもって存在する、という主張である。次に、このネーションの利益と価値は、他のすべての利益と価値より重要である、という主張である。そして最後に、ネーションは、できる限り独立した状態、つまり政治的主権を得た状態、でなければならない、という主張である。これら3つの主張を1つの政治的教義とし、それを大義名分にすることによって国家権力の獲得を目指したり、国家権力を行行使する政治運動が、ナショナリズムである、ということになる (*ibid.*: 2)。

J・ブルイリーは、*Nationalism and the State* (1982) の中で彼のナショナリズム論を最初に述べたが、1996年の 'Approaches to Nationalism' と題する論文の中で、若干の修正を加えた上で、その概要を短くまとめている。ここではその論文の内容に沿って、J・ブルイリーのナショナリズム論を見ていくことにする。

J・ブルイリーのナショナリズム論は、先にも述べたとおり、ナショナリズムの政治的側面を重要視する。従って、文化、イデオロギー、アイデンティティ、経済、階級などの側面に焦点を合わせることは間違いである、とされる。J・ブルイリーにとって、ナショナリズムは何よりもまず政治的現象であり、それゆえに権力をめぐる運動である。近代国家システムの中にある近代世界においては、権力は、根本的に国家の統制と深い関わり

がある。従って、ナショナリズムを分析するにあたって中心的なアプローチとすべきは、ナショナリズムを、国家権力の獲得と行使という目的に結びつけて考える、政治的アプローチである。(J. Breuilly 1993 [1983] : 1)。確かに、イデオロギー、感情、アイデンティティは、ナショナリズムの一側面を示すものであるが、それらはむしろナショナリストの政治運動によって凝集され、首尾一貫したものとなる。ナショナリストの政治運動は、それが政府によるものであろうと反政府勢力によるものであろうと、散漫な観念を1つのまとまりのあるイデオロギーに練り上げ、それを実践的な目標へ向かわせる。また、ナショナリストの政治運動は、散漫な人々の感情をある特定の、ナショナリスティックな方向へ向かわせる。それらのことを考えれば、ナショナリストの政治運動がまずあるからこそ、ナショナリズムのイデオロギーやナショナルな感情が重要な要素となり、社会全体に大きな影響を与えるのである。従って、ナショナリズムを理解するにあたって最初に考えなければならないことは、国家権力の獲得およびその行使をめぐる、ナショナリストの政治である、とJ・ブルイリーは主張する(J. Breuilly 1996 : 163)。

次に、そのような政治的現象としてのナショナリズムが、近代化のプロセスという枠組みの中で生じたものであることを理解しなければならない、とJ・ブルイリーは主張する。これは、J・ブルイリーが近代主義者であることを明確に示すものである。「近代化のプロセス」について、J・ブルイリーはE・ゲルナーが *Plough, Sward and Book* (1988) で示した「包括的分業」(the generic division of labor) という概念を発展させ、その本質を明らかにしようとする。ここで言う「包括的分業」とは、経済活動における分業のような特定分野の分業ではなく、人間活動全般における分業である。それは主に、権力、文化、経済の3つの分野における分業であり、それらが個別にそれぞれ洗練されていき、互いに以前とは異なる関

係性を築いていくプロセスを経る。その変遷的プロセスこそが、近代化の本質である、と考える。J・ブレイリーによれば、前近代における包括的分業は、団体的（corporate）であった。例えば、中世ヨーロッパのギルドはその典型であるという。ギルドは、商品やサービスの生産と供給を統制する、経済的な面での機能を果たすが、それだけではない。メンバーに教育プログラムを提供したり、娯楽や行事を組織して、文化的な面における機能も果たす。また、ギルドは法廷を運営したり、メンバーのための地区政府を組織するといった、政治的な面における機能をも果たす。前近代における教会、荘園（lordship）、農民共同体、そして君主国家といった組織においても、ギルドと同じように多機能的で、経済、文化、政治といった分野を全般的に取り扱ってきた。前近代のヨーロッパにおいては、このような団体的分業（corporate division of labor）の形態が一般的であった、とJ・ブレイリーはいう（*ibid.* : 163-4）。

18世紀後半になると、その団体的分業の形態は、激しい批判にさらされ、ヨーロッパの多くの地域で次第に崩壊していった。批判は主に、啓蒙思想、自然科学、政治経済学などの分野における、合理主義的信条と結びついたものであった。その合理主義的信条によれば、経済、文化、政治といった異なる機能は、それぞれ別々の組織に集中させられるべきであった。従って、経済に関する機能は、他の機能から切り離され、自由市場の中の個人と企業に委ねられるべきだと考えられるようになった。教会もまた、政治的機能から切り離され、信徒の自由な集まりによる組織になるべきだと考えられるようになった。そして政治権力は、代議員による議会が啓蒙君主の統制下にある官僚機構によって行使されるべきだと考えられるようになった。このようにして、団体的分業の形態は次第に崩壊し、それぞれの機能に従って別々の組織が分業する、J・ブレイリーが言うところの「機能的分業」（a functional division of labor）の形態に移行していった。政治権

力が集中する近代国家の出現も、このような包括的分業における変遷（近代化のプロセス）の中で生じたものであった（*ibid.* : 164）。

J・ブルイリーは、この近代化のプロセスの中で出現した近代国家が、ナショナリズムの発生と深い関係があると考える。近代国家は、公的権力（public powers）を議会や官僚などの国家専門機関に集中させる一方、私的権力（private powers）を自由市場、私企業、家族などの非政府組織に委ねた。その過程の中で、教会、ギルド、荘園などの旧組織は、それまで保持してきた公的権力を国家によって奪われ、私的権力を民間社会（civil society）に明け渡した。このようにして、公的権力としての国家、そして私的権力としての民間社会という、2つの組織観念が現れ、ある一定の現実性をもつようになった。近代国家は、ヨーロッパの国家間競争の中で出現し、主権を有するものであるとされたため、明確に確定された境界を有する観念であった。一方、民間社会は、私的権力は有するが、主権や明確に確定された境界をもたない観念であった。これらの2つの異なる観念、つまり近代国家と民間社会という観念が、並存する状況の中で、政治・社会的秩序を確立しようと努める者（政治エリート）にとっての主たる問題は、いかにして国家と民間社会を接合させるか、ということであった。要するにそれは、公民（citizen）としての公的利益と、利己的な個人（又は家族）としての私的利益との間に、どのようにして調和をもたらし、それを維持するか、という問題であった。その問題が解決されない限り、政治・社会的秩序を確立することはできないように思われた。J・ブルイリーによれば、この問題の解決策（a solution）として現れたのが、ナショナリズムであった（*ibid.* : 164-5）。

解決策として現れたナショナリズムには、政治的な側面と文化的な側面が混在していた。政治的な側面からのナショナリズムは、シチズンシップの概念を民間社会に押し付ける形をとった。それによれば、個人からなる

民間社会は、同時に、シチズンからなる政体であると定義された。極端に言えば、ネーションはシチズンの集合体であった。そこで重要なことは、文化的アイデンティティなどではなく、シチズンとしての政治的権利であり、国家との関係であるとされた。文化的な側面からのナショナリズムは、民間社会の文化的一体性を強調する形をとった。これは政治エリートが、彼らの政策を実施するにあたって、様々な社会集団から全体的に支持を取り付けるために必要であった。また、民間社会の一体性を強調することは、国家の政策を正当化するためにも有効な手段であった。確かに、産業やコミュニケーションの近代化は、異なる社会集団からなる民間社会に文化的な一体性をもたらす傾向にあった。しかし、ナショナリズムは、民間社会の文化的一体性を強調し、意図的に文化的な集団アイデンティティを提供した。当然のことながら、ナショナリズムに混在する2つの側面、すなわち政治的側面と文化的側面は、現実には調和しているものではない。それにも関わらず、それら2つの側面は、「ごまかし」(a sleight of hand)のイデオロギーであるナショナリズムによって結び付けられた。先に挙げられた「ナショナリストの主張」によれば、ネーションは、できる限り独立した状態、つまり政治的主権を得た状態にあるべきである。これは、シチズンの集合体であるネーションの主権を主張するものである。そして、ネーションは、明白で独自な特徴をもって存在する、という主張は、ネーションの文化的一体性を主張するものである。そして、このネーションの利益と価値は、他のすべての利益と価値より重要である、という主張は、ネーションを愛し、守らなければならないことを主張するものである。これらの「ナショナリストの主張」を1つの政治的教義とし、ナショナリズム運動が展開された。そのようにして、機能的分業によって生じた2つの異なる組織観念、すなわち近代国家と民間社会を、「ごまかし」であれ、調和させ、政治・社会的秩序を確立しようとした。その上で、政治エリート

は国家権力の獲得と行使を目指したのである。近代的环境においてこれらのことを達成するには、政治レトリックと運動を展開し、幅広い層の人々や集団にアピールしなければならなかったが、政治エリートは、ナショナリズムを利用することによってそれを達成しようとした (*ibid.* : 165-6)。

従って、J・ブルイリーにとってナショナリズムとは、「ナショナリストの主張」によって近代国家と民間社会を結合させる政治的解決策 (a political solution) であり、それを大義名分にして国家権力の獲得と行使を目指す政治運動である。これがナショナリズムを分析する上で最も基本となる考え方である。一方で、ナショナリズムは様々な形態をとってきた。そのことから、J・ブルイリーは、個々のケースを分析するためにはナショナリズムを類型化する必要があると考え、3つの類型を示す。1つは、分離型 (separation) である。ナショナリズム運動が既存の国家 (又は帝国) 領域の一部分に向けたものであった場合、それは分離型の類型に属する。2つ目は改革型 (reform) で、それは、既存の国家 (又は帝国) 領域と同一の領域を、ナショナリストの主張によって変革しようとする場合である。3つ目は統合型 (unification) で、それは、対象とする領域が国家のそれよりも大きく、複数の国家を統合させようとする場合である。このようにナショナリズムは、国家との関係における、その対象とする領域によって、分離型、改革型、統合型の3つの類型に分けられる (*ibid.* : 166)⁽¹³⁾。

このようにナショナリズムを3つに分類した上で、J・ブルイリーは、「ナショナリストの主張」が政治エリートによってどのように利用され、機能を果たすか、3つに分類する。1つ目は、調整機能 (coordination) である。既存の国家権力に対抗するにあたって、政治エリートの多くは異なる利害を有するものだが、ナショナリストの主張は、それらの異なる利害を調整し、共通の利益を生み出すために利用される。2つ目は、動員機

能（mobilization）である。この場合、ナショナリストの主張は、それまで政治プロセスから除外されていた大衆を動員し、政治エリートが進める政治運動への支持をとりつけるために利用される。3つめは、正当化機能（legitimacy）である。この場合、ナショナリストの主張は、対抗する国家権力や諸外国に向けた政治運動とその目標（国家権力の獲得と行使）を正当化するために利用される。J・ブレイリーによれば、およそほとんどのナショナリズムは、3つの類型のどれかに当てはまり、ナショナリストの主張が果たす機能は主に3つに分類される（*ibid.*: 166-7）。*Nationalism and the State* では、30にも及ぶ歴史的ケースが、これらの類型に当てはめられながら、比較分析されている。

以上がJ・ブレイリーのナショナリズム論の概略である。これは近代主義全般、そして特に政治的アプローチに関して言えることだが、ナショナリズムとネーションを、政治エリートが利用する道具・手段としてとらえる傾向がある。P・ブラスは、そのような道具・手段主義（instrumentalism）の代表的論者である。P・ブラスは、政治的権力闘争の中にある政治エリートが、人々を動員し、政治的連合（political coalitions）を強化化するために、言語や文化のシンボルを選択的に利用することに注目した（P. Brass 1991）。E・ホブズボームも、政治エリートが、特に「伝統の創造」を通じてナショナルアイデンティティや大衆文化を創出（invent）し、それらにアピールすることによって人々を動員し、彼らの政治目的のために利用してきたことに注目した（E. Hobsbawm 1990）。P・ブラスやE・ホブズボームの視座は、既に見てきたJ・ブレイリーのナショナリズム論同様、政治的アプローチの範疇に入る。政治エリートによるナショナリズムの利用、および社会操作（social engineering）に注目することは、政治的アプローチの特徴と言える。

第5節 政治的アプローチその2 M・ヘクター

M・ヘクターの *Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development* (1975) は、「国内植民地」(internal colonialism) 又は「文化的分業」(cultural division of labor) の理論を提起したことで知られている。その内容は、経済を主たる説明要因とし、以下のようなものであった。一国内において経済は不均等に発展するもので、都市部と地方周辺部に経済格差が生まれる。都市部は工業化によって経済発展の恩恵(教育機会や収入の高い職業等の恩恵)を受ける一方、地方周辺部は原材料や食料、そして低賃金労働力を都市部に供給するだけで経済的発展の恩恵を受けられないという、構造的な社会的格差が生じる。このように、都市部の人々が構成する上層労働市場と、地方周辺部の人々が構成する下層労働市場がそれぞれ分立し、2重、かつ支従の労働市場が形成され、一種の分業体系ができる(M. Hechter 1975: 9-10)。そしてもし都市部と地方周辺部の人々が、それぞれ異なる人種やエスニック集団によって占められている場合は、先に述べた分業体系が、それぞれの文化によって境界線が引かれる、いわゆる「文化的分業」という形をとることになる(*ibid.*: 39-40)。そうなった場合、地方周辺部の人々は、経済的にも政治的にも都市部によって搾取されるだけでなく、文化的にも支従関係に置かれる、いわば「国内植民地」となる。イギリスの周辺部(fringe)であるケルト文化圏、つまりウェールズ、スコットランド、そして北アイルランドは、イギリスの、正にそのような国内植民地であり、それらの地域のナショナリズム(自治獲得運動)は、その状況に対する反動(reaction)として説明される(*ibid.*: 10)。

M・ヘクターの国内植民地論、又は文化的分業論は、結局のところ、

地域的な経済格差と搾取に起因する地方周辺地域の人々の不満と反動に、ナショナリズムという現象を還元する理論であった。その意味でも、T・ネアンの理論同様、ナショナリズムの発生を経済的要因によって説明するものであり、マルクス主義的である。問題は、それらの経済的な説明にそぐわない事例が多く存在したことであった。例えば、スペインのカタロニアやイギリスのスコットランド、旧ソ連のバルト3国、旧ユーゴスラビアのクロアチアなど、国内でも決して貧しいとは言えないような地域にナショナリズムが生じたことは、国内植民地論の妥当性を大きく低下させた。また逆に、後進地域におけるナショナリズムの不在を説明するにも、別の理論を付け加えないかぎり、不可能なように思われた。それらの批判に対し、M・ヘクターは合理選択論（rational choice theory）を採用して対応した。また、文化的分業をヒエラルキー型と分離型（segmented）に分け、後者の場合は国内にありながらも市場が分離しているがゆえに、先進地域であってもナショナリズムに結びつくことがあるとした（M. Hechter 1985：21-2）。これらの修正は、M・ヘクターの国内植民地論、又は文化的分業論が、もはや単独では批判に耐えることができないことを意味した。

Containing Nationalism（2000）は、文化的分業論と合理選択論を生かしつつ、新たな、政治的枠組みの中でナショナリズムの由来を説明し、それを封じ込めるための政治的制度を考察した書である。ナショナリズムは何よりもまず政治的な現象である（M. Hechter 2000：6）、と宣言したM・ヘクターのナショナリズム論は、以前の経済的アプローチから、政治的アプローチに移行した。その中心的な説明要因は、近代中央集権国家の出現であり、J・ブルイラーらと、その立場を共にする。M・ヘクターによる政治的アプローチのオリジナリティは、中世国家による間接統治（indirect rule）から、近代中央集権国家による直接統治（direct rule）へと移行した政治的変遷を、近代におけるナショナリズムの発生に結びつけたと

ころにある。以下では、その内容を詳しく見ていくこととする。

M・ヘクターは、彼のナショナリズム論を展開する前に、ナショナリズムおよびネーションの定義を示す。E・ゲルナー（1986）らの古典的な定義によれば、ナショナリズムとは、ネーションと国家の境界を一致させることを目的とした政治運動を指す、とのことであった⁽¹⁴⁾。だが、M・ヘクターによれば、そのようなナショナリズムの古典的定義は最適であるとは言えない。なぜなら歴史的に見て、大多数の共同体は、国家という組織を持たずに存続してきたからである。そこでM・ヘクターは、国家という単位ではなく、統治（governance）という単位を採用する。「統治単位」（governance unit）とは、その成員に対し、大体における社会秩序、略奪からの保護、正義（justice）、そして福祉などの公共財（collective goods）を提供する義務を負う、領域的な単位を指す（M. Hechter 2000：9）。国家もまたひとつの統治単位であると言えるが、国家の場合は、統一通貨の管理、そして国際外交や安全保障などを管理する義務を負う。従って、M・ヘクターが「統治単位」と言うとき、それは国家を指す場合もあるし、国家ではない州（例えばカナダのケベック州やオスマントルコ帝国のミレット）のような統治単位を指す場合もある、ということである。ところでネーションとは、文化的独自性を有し、自治（self-governance）を求める、領域的に密集するエスニック集団を指す（*ibid.*：7-14）。従って、ケベック人やクルド人はネーションであるが、領域的に密集していないエスニック集団、例えば、ユダヤ系アメリカ人、アルジェリア系フランス人は、ネーションではない。このようにして統治単位とネーションを定義した上で、M・ヘクターはナショナリズムを以下のように定義する。ナショナリズムとは、ネーションとその統治単位の境界を一致させることを目的とした集団的運動である（*ibid.*：7）。国家の代わりに統治単位という単位を採用した点において、M・ヘクターの定義は、古典的定義を世襲

しつつも、画期的であるといえる。ナショナリズムの種類として、国家建造 (state-building) ナショナリズム、周辺 (peripheral) ナショナリズム、統一 (irredentist) ナショナリズム、統合 (unification) ナショナリズム、の4つを挙げている (*ibid.* : 16)。これについては後に詳しく説明することとする⁽¹⁵⁾。

一連の定義とナショナリズムの種類を示した後、M・ヘクターは、ナショナリズムがなぜ、前近代には生じ得なかったかを説明する。定義によれば、ナショナリズムは、ネーションとその統治単位の境界を一致させようとする集団運動である。ならば、ネーションとその統治単位が一致しているとき、ナショナリズムを起こす動機は生まれない。その場合、ネーションは既に一定の自治権を得ている状態にあるかである。M・ヘクターによれば、前近代の帝国や国家内部においては、概してこのような状態が存在したのだという。誤解してはいけないことは、前近代の帝国や国家といった政体とネーションの境界が一致していた、とM・ヘクターが言っているわけではない、ということである。前近代の帝国や国家は、概して、複数のネーションをその領域内に包含する、マルチナショナル帝国、またはマルチナショナル国家であった。例えば、ハプスブルク帝国やオスマントルコ帝国、又はイギリスやフランスといった国家の領域内には、複数のネーションが存在した。M・ヘクターが言いたいことは、それら複数のネーションが、前近代においては、それぞれ自らの統治単位と自治権を有していた、ということである。

前近代における交通および通信技術のレベルでは、帝国はもとより、比較的小さい規模の国家においても、中央の支配者は、遠く離れた領土を直接支配することはできなかった。従って、間接支配 (indirect rule) という形態に頼らざるをえなかった。中央の支配者は、名目上、全領域に渡って権限を主張するが、實際上、直接支配できているのは都のある中央部だ

けであって、遠く離れた領土では地方の有力者に権限を委託し、彼らを媒介して地方での影響力を行使した。同時に、中央の支配者は、地方が侵略の脅威にさらされたときには、軍隊を派遣して地方の安全を守る義務を負った。中央から権限を委託された地方の支配者は、見返りとして地方住民から徴収した租税を中央に上納し、戦時には援軍を派遣した。地方の支配者は事実上、その地方を彼らが望むように統治する権限を保持した。このように、前近代の帝国および国家の間接支配のシステムは、言ってみれば、分権化された、地方自治のシステムであった。地方周辺部のネーションは、前近代においては、それぞれ自らの統治単位と自治権を有していた、ということである (*ibid.* : 26-8)。

例えば、中世カトリック世界の中において最も早くから主権国家の政体を形成したイングランドでも、中央は間接支配のシステムに大きく依存していた、とM・ヘクターは言う。15世紀末には、ロンドンからヨークまでの移動が6日間もかかった。それが、16世紀末には55時間に短縮された。これは、道路の整備が進み、通信能力が向上したことを意味した。しかし、M・ヘクターが参照する当時の郵便業務の記録によれば、一旦主要道路から外れると、道路の状況は劣悪で、地方への通信能力は極めて制限されたものであった。この脆弱な交通・通信システムに頼りながら、中央（ロンドン）が直接的に地方を統制することは、技術的にもコスト的にも不可能であった。従って中央は、地方を支配するために間接支配という形態をとらざるをえなかった。M・ヘクターは、地方を統治した統治単位として「荘園」(manor)を例に挙げる。荘園は、中世イングランドの地方における、統治単位である。荘園は、自らの軍隊を持ち、当該領土と住民を外敵から守り、法や他の公共財を提供した。荘園は、イングランド国王に対し様々な義務を負うが、間接支配のシステムを構成する、ひとつの独立した統治単位であった (*ibid.* : 46-7)。

M・ヘクターはC・ティリーを引きながら、間接支配がいかに中世ヨーロッパで普遍的な統治形態であったかを説明する。フランス革命以前のヨーロッパでは、全国家領域における上層から下層までの人々を直接支配するような機構を創り上げようとする国家は存在しなかった。小国を除いた全ての国家は、何らかの間接支配の形態に依存した。そのため、地方統治単位による背信行為、隠蔽、腐敗、反乱等のリスクを常に負ったが、一方で間接支配は、設立と維持のコストが莫大になる巨大な行政機関を持つことなしに、国家全域を支配することを可能にしたのである（M. Hechter 2000：50；C. Tilly 1990：25）。

ヨーロッパ以外の中世世界、例えばオスマントルコ、エジプトのマムルーク、中国の清、インドのムガルなどの帝国、または江戸時代の日本のような小国においても、間接支配の形態をとった（M. Hechter 2000：49-52）⁽¹⁶⁾。19世紀以前、帝国や国家は皆、交通や通信などの技術的な限界のため、間接支配という支配形態を通じて地方を支配した。間接支配される地域は、その地域自らの統治単位を形成し、中央はその地での出来事に干渉しようとしなかった。中央は、地方を統治する権力に対して、大きな脅威とはならなかったのである。間接支配の形態から生ずるこのような状況は、ナショナリズムの発生を妨げる。中央は中央のネーションを直接統治するかたわら、地方のネーションがそれ自らの統治単位を持つことを可能にし、どのネーション（少なくともその支配者）も大体における主権を行使できる状態にあったからである。要するに、ネーションとその統治単位が一致していたから、ナショナリズムが生じる状況ではなかったのだ。これが、M・ヘクターが考える、19世紀以前にナショナリズムが生じなかった理由である。

19世紀以降にナショナリズムが生じ始めたのは、その、ネーションと統治単位が一致しているという状態が崩壊し始めたため、それを一致させよ

うとする運動が起きたからに他ならない。そしてM・ヘクターによれば、そのネーションと統治単位が一致しているという状態を崩壊させた要因は、直接支配を志向する近代的中央集権国家の出現である。近代的中央集権国家は、直接支配を志向するがゆえに、全領域と全住民における統治に関し、直接的な義務と権利を有することを主張する。そのことは同時に、以前まで実質的な主権を有していた地方の統治単位から、中央が権力を奪い取る、ということの意味した。つまり、地方の統治単位は、もはや主権を有する統治単位ではなくなり、中央集権国家の単なる一組織となったのである。ここに、マルチナショナル国家またはマルチナショナル帝国の内部において、それぞれのネーションとその統治単位が一致するという状況が崩壊する。ナショナリズムは、その中から生じてくる (*ibid.* : 56)。

M・ヘクターは、近代国家がなぜ、中世のような間接支配ではなく、直接支配を志向したのか、その主な理由を2つ挙げている。1つは、直接支配のための技術的条件が、19世紀以降になってようやく整った、というものである。中世においても中央の支配者は本来的には直接支配を望んだが、技術的条件によって制限されていたため、背信行為や腐敗の可能性があるにもかかわらず、間接支配という形態に頼らざるをえなかったということは先に述べたとおりである。産業化が進んだ19世紀に入り、近代的で効率の良い通信および交通のシステムが整備された。また、資本経済と貨幣経済が発展することによって、人・金・物の流通が活発化した。さらに、教育の普及により、大量に、よく訓練された官僚が、効率的に国家組織の運営に携わるようになった。これらの技術的条件が整い、直接支配を実施するためのコストは大幅に低下し、実施可能な支配形態となった。従って、中央の支配者は、このにわかに与えられた機会をとらえ、直接支配に向けて動き出した、というのが1つ目の理由である (*ibid.* : 58)。あと1つの理由は、軍事費の増加に由来するものである⁽¹⁷⁾。19世紀までに、ヨーロ

ッパ諸国の間で激化した重商主義と軍事的対立に由来する地政学的圧力は、戦争遂行能力の不断なる向上を支配者に要求した。その中であって、軍事技術の発達により、近代的な装備が生み出されたこともあり、軍事費は急速に増加していった。中央の支配者は、その増加した軍事費をまかなうために、税収を上げなければならなかった。その要求を満たすには、より効率的に、より多くの租税を徴収できるシステムを構築する必要があった。その要求に応えることができたのが、直接支配の形態であった。直接支配は、急速に増加しつつあった軍事費をまかなう必要に応えるものであった。M・ヘクターは、2つの理由は異なるメカニズムを有するが、いずれにしても、相互補完的なものであるという (*ibid.* : 59)。

M・ヘクターは、18世紀後半から19世紀にかけて間接支配から直接支配へ移行したフランスを例にして説明する⁽¹⁸⁾。フランス革命以前のフランスは、王室直属の使節を各地へ送り込み、税金を徴収してまわった。しかし地方の統治は、貴族や司祭らの地元有力者に委ねられ、間接支配の形態がとられていた。この王権と地方の関係が安定している以上、大きな問題は生じなかった。だが、先に述べたように、軍事費の増加に伴い、王権がより多くの税金を徴収し始めると、地方の有力者や農民が反発した。そして1789年、フランス革命に至った。地方の有力者は当初、革命政府の中央集権化に抵抗していた。そこで革命政府は、フランス国家を新たな行政単位に分け、省、管区、郡、市町村自治体を置いた。更に、租税、司法、行政、警察などの制度を刷新し、軍隊は統合され、革命政府の管理下に置かれた。これらの新しい制度は中央でコントロールされ、地方まで浸透していった。このようにして、フランスの直接支配の形態は確立されていった。革命政府は新たな制度を通じて経済の活発化と税収増加を推し進め、軍隊の近代化と強大化をもってして、フランスを非常に効率の良い、近代的中央集権国家に造り変えた (*ibid.* : 57-8)。

フランスのようなマルチナショナルな政体における直接支配の実施は、少なくとも3つのタイプのナショナリズムを生じさせた、とM・ヘクターはいう。それらは、国家建造ナショナリズム (state-building nationalism)、周辺ナショナリズム (peripheral nationalism)、そして統合ナショナリズム (unification nationalism) である。最初に現れたタイプである国家建造ナショナリズムは、マルチナショナルな国家を1つのネーションからなる国家に造り変えることによって、ネーションと統治単位（この場合は国家）を一致させることを目標とする。従って、国家建造ナショナリズムは、必然的に国内の文化的均一性と同化を追求する。そうすることによって、マルチナショナルな状態を1つのネーションに造り変え、その文化的均一性をもって、直接支配を正当化し、よりスムーズに直接支配を実施できた。例えばフランス語の普及は、国家の徴兵制度や学校制度を通じて進められた。また、国歌、国旗、国家記念碑、国家行事など、「新しい伝統」を活発に創出することによって、それまで地方に向けられていた民衆の忠誠心とアイデンティティを、国家に向けさせた (*ibid.* : 62-4)⁽¹⁹⁾。このような国家建造ナショナリズムを推し進めたフランス以外の国は、イギリス、アメリカ、スペインなどであった (*ibid.* : 15-6)。

国家建造ナショナリズムは、直接支配を目指す中央集権国家が推し進めたものであった。そしてそれが、歴史上初めてのナショナリズムであった。その反動によって現れたのが、周辺ナショナリズムである。周辺ナショナリズムは、ホスト国家の周辺に位置するネーションを分離独立させることによって、ネーションとその統治単位を一致させようとするものである。ホスト国家が間接支配の形態をとっていた中世には、周辺のネーションは自治権を与えられていたため、このようなナショナリズムが生じえなかったことは、先にも述べたとおりである。中央集権国家（例えばフランス）が国家建造ナショナリズムによって文化的均一化と直接支配を強めると、

権力と自治権を手放したくない地方ネーションの有力者は、中央に対抗するために周辺ナショナリズムを発動する。また、M・ヘクターによれば、中央による直接支配の強化は、中央と地方の間の文化的分業（cultural division of labor）を推し進めるため、地方エリートによって主導される周辺ナショナリズムは、一般民衆の間でも共鳴が生じ、大きな運動になるという。この周辺ナショナリズムは、フランスのブルターニュ、オシタニア、コルシカ、イギリスのケルト周辺部（Celtic fringe）、カナダのケベック、スペインのバスクやカタロニアなど、ヨーロッパだけでなく、全世界で最も多く見られるタイプのナショナリズムである。弱体化の過程にあったオスマントルコは、より多くの資源と権力を中央に集中させるために、18世紀の後半になって直接支配の体制を強めていった。その結果、セルビア、ギリシャ、ルーマニア、ブルガリア、アルバニア、そしてアラブの諸州が、周辺ナショナリズムを発動した。このように、ホスト国家が国家建造ナショナリズムや直接支配を推し進めようとする、それに対抗する形で周辺ナショナリズムが生じてくる、という構図をM・ヘクターは示す（*ibid.* : 70-7）。

3つ目のタイプのナショナリズムは、統合ナショナリズム（unification nationalism）である。統合ナショナリズムは、比較的に文化的均一性が見られる領域において、複数の小規模統治単位を束ねる形で新しく国家を建設しようとする運動である。従って、そのプロセスは、現存するマルチナショナル国家の境界内で文化的均一性を創り上げようとする国家建造ナショナリズムとは逆である。典型的な例として挙げられるのは、19世紀のドイツ、イタリア、日本である⁽²⁰⁾。ドイツとイタリアにおいて統合ナショナリズムを生じさせた要因は、ナポレオン戦争という外部からの衝撃であった（日本について言えば、ペリー来航という外部からの衝撃であった）。ナポレオン率いるフランス軍の勝利は、ヨーロッパ大陸の諸国に対

し、直接支配を採用した近代的中央集権国家フランスの、強大な軍隊およびそれを支える経済・財政システムの優位性を証明した出来事であった。ドイツもイタリアも、ナポレオンに征服された当時、それぞれの主権を有する大小諸国に分裂した状態にあった。ナポレオンは、プロシアを除いたドイツをライン同盟（1806年）によって1つに束ね、イタリアも3つの管区に整理し、征服地の改革を進めた。しかし、ナポレオンがプロシア・ロシア・オーストリア連合軍に敗れると、ドイツとイタリアは再び分裂していった。そのような状況の中にあって、ドイツとイタリアのエリート層は、近代的中央集権国家となることによってヨーロッパの強国となったフランスとイギリスに対抗し、国際競争を勝ち抜くために、ネーションの統合と近代国家の建設を訴えた。ドイツはプロシアのビスマルク、イタリアはピドモンテ（Piedmont）のケーヴァー（Cavour）が中心となり、統合ナショナリズムが推し進められた。このように、ドイツとイタリアの統合ナショナリズムは、国家建造ナショナリズムと直接支配によって強国化したフランスの、脅威に対抗するべく、それに反応した結果に生じたものである、とM・ヘクターは考える。一旦ネーションの統合が達成されて国家が建設されると、国力を高めたいドイツとイタリアは、フランスに習い、国家の中央集権化と直接支配を推し進めた。ドイツとイタリアの統合ナショナリズムは、その主な役割（ネーションの統合と国家の建設）を終え、次第に、国家建造ナショナリズム（国家領域内のネーションの更なる均一化）に移行していった（*ibid.* : 85-91）⁽²¹⁾。ここまではドイツとイタリアの例であったが、一般的な議論をすれば、統合ナショナリズムにしても国家建造ナショナリズムにしても、完全なる文化的な均一性は得られないことを考えると、そこには常に周辺ナショナリズムが生じる可能性が秘められている、ということになる。

ここまでのM・ヘクターの議論をまとめると、以下のような一連の主張

が浮かび上がる。まず、ナショナリズムが生じる環境は、構造的に前近代には存在しなかった、という主張である。それは、前期代における帝国や国家の間接支配が、周辺地域に自治権を行使できる環境を与えていたからである。次の主張は、19世紀の近代西欧国家が間接支配から直接支配に移行したことにより、世界で始めてナショナリズムという現象が現れた、という主張である。近代ヨーロッパでは、政治・経済的な地政学的競争による必要性から、また、技術的な進歩によってそれが可能になったこともあり、フランス、イギリス、スペインなどのマルチナショナル国家が直接支配に乗り出した。直接支配は、中央集権国家によって国家建造ナショナリズムが推し進められる形で達成され、それらの国家は強国となっていった。3つ目の主張は、国家建造ナショナリズムが、その副産物、または反動として、周辺ナショナリズムと統合ナショナリズムを生じさせた、というものである。周辺ナショナリズムと統合ナショナリズムは、両方とも究極的には国家の樹立を目指す、その根本では、ネーションとその統治単位を一致させようとする運動である。その目的はやはり直接支配であり、国家が樹立された場合は、中央集権化と国家建造ナショナリズムに移行する（通常異なる文化集団が国家内に包含されるため、その反動として、また別の周辺ナショナリズムが生じる可能性がある）。このプロセスは、主としてヨーロッパで始まったものであるが、その後の世界において普遍的に見られる現象となった。

これらの主張に基づき、ナショナリズムを封じ込める方策をM・ヘクターは考察する。もしナショナリズムが直接支配という国家の中央集権化に端を発しているのなら、その中央集権体制を改め、分権体制（間接支配体制）を創り上げれば、ナショナリズムは抑制できるはずである。従って、分権制度を確立することが、ナショナリズムを抑制する最良の方策である。また、そのプロセスにおける公正な意思決定も重要である、とM・ヘクタ

ーは言う。M・ヘクターは、コンソーシエーションナリズム、投票システム、そして連邦制度の3つを考察した上で、いずれも問題は残るが、分権制度を進める上で最も適しているという理由で、連邦制度が好ましい、という結論に至る (*ibid.* : ch.8)。

第6節 近代主義の批判

ここまで近代主義を、イデオロギー的アプローチ、経済的アプローチ、そして政治的アプローチの3つに分類し、それぞれのナショナリズム論を見てきた。その中で明らかなことは、一言で「近代主義」と言っても、それぞれの主張は大きく異なり、時には互いを論敵としながら発展してきた、ということである。先行研究を批判的に検証し、その上で新たな理論を展開することがその分野における学問的貢献であるとする、主張の多様性は当然の結果であり、歓迎されるべきことである。

近代主義に共通して言えることは、その論者が、ナショナリズムの発生を近代化プロセスと結びつけ、近代特有の現象であると考えた点である。従って、近代主義者にとって、ナショナリズムは近代以降においてのみ、生じる現象である。そして、ネーションはナショナリズムによって創り出される。つまり、ネーションが国家とナショナリズムを創り出すのではなく、その逆である (E. Hobsbawm 1990 : 10)、と考える点でも、近代主義はほぼ共通している。

ナショナリティやエスニシティを、政治エリートやインテリの道具・手段として考える傾向も強い。しかし、道具・手段主義 (instrumentalism) は近代主義だけが採用している立場ではない。例えば、社会生物学的原初主義 (P. L. van den Berghe 1978 : 1981) は、ナショナリティやエスニシティを「包括的適応」 (inclusive fitness) や「遺伝子再生産」 (genetic re-

production) の道具・手段として考えるし、エスノシンボリストは、ナショナリティやエスニシティがインテリによって利用されることを認めている。とは言え、近代化プロセスの中で、インテリや政治エリートによってネーションが創り出されたと考える近代主義は、道具・手段主義を強調する度合いが他のアプローチより格段に高いことも確かであろう。

これらの近代主義に共通する主張に対し、ほぼ全面的に異議を唱えるのが原初主義である。そして、「近代主義の半分は正しい」としながらも、前近代におけるエスニーの役割を無視する近代主義を批判するのが、エスノシンボリズムである。それら2つのアプローチについては、ここで詳しく紹介することはしない。ここではむしろ、近代主義の内部から寄せられる批判を中心に、近代主義に対する批判を見ていくこととする⁽²²⁾。

近代主義者による還元主義的説明は、ナショナリズムの多様性を説明できない、という批判

近代主義論者に対する批判で最初に指摘したいのは、その還元主義(reductionism) 的説明である。ここで留意したいことは、近代主義者が頑固に1つの要因だけを認め、他の要因を全て排除している、ということを行っているのではない、ということである。それぞれの論者の複雑な議論を丹念に見ていけば、イデオロギー、経済、政治などの側面が、互いに絡み合う部分が多々ある。ただ、近代主義論者は、ナショナリズムという現象を説明する上で、ある1つの要因を他の要因と比較して、特に重要視していることは確かである。その意味で、近代主義者の多くの議論は、還元主義的である。

例えば、E・ケドゥーリによれば、アジアやアフリカにおけるナショナリズムは、ドイツロマン主義者が発明したイデオロギーが拡散した結果、発生し、発展したものである。そのナショナリズムのイデオロギーは、ア

ジア・アフリカの、西洋化した現地エリートによって輸入され、利用され、拡散していった。アジア・アフリカの現地エリートは、西洋（植民地）社会から拒絶され、又、西洋化していたがゆえに現地の伝統社会にも居場所を見つけることができなかった、所謂「疎外された人々」(marginal men)であった。彼らは、かつてフィヒテラドイツロマン主義者が発明したナショナリズムを利用し、人々を動員し、自らのネーションを創り上げることによって、それと自己同一化して、心理的な所属の欲求を満たそうとした（ドイツロマン主義者もまた同じように「疎外された人々」であった）。このように、E・ケドゥーリのナショナリズム論は、ドイツロマン主義思想の力を強調し、その拡散によって世界中のナショナリズムを説明する、イデオロギー還元論である。

E・ケドゥーリのイデオロギー還元論に対して指摘すべき最初の問題点は、そもそも19世紀初頭、フィヒテラドイツロマン主義者によってナショナリズムの教義が編み出されなかったなら、ナショナリズムは世界に存在することはなかったのか、というものである（E. Gellner 1983：127-8）。更に言えば、カントが彼の自由論を示さなかったなら、又はヘルダーが彼の言語論を示さなかったなら、我々人類はナショナリズムという現象を知ることにはなかったのか。ナショナリズムがこれほどまでに普遍的な現象になったことを考えると、ドイツロマン主義思想自体の力というよりは、もっと何か普遍的な要因による作用があったのではないか。E・ゲルナーにとってその普遍的な要因とは産業化であり、T・ネアンにとっては資本主義であった。また、J・ブルイリーとM・ヘクターにとって、それは近代中央集権国家の出現であった。確かにイデオロギーは、ある共同体における様々な社会集団の希望と不満を統一し、人々を動員する力を持つ。その意味で、ナショナリズムの発展にとってイデオロギーは、間違いなく重要な要因である。しかし、J・ブルイリーが言うように、散漫な観念を1つ

のまとまりのあるイデオロギーに縛り上げるのは、主として政治であり（J. Breuilly 1996 : 163）、その言説である（C. Calhoun 1997 : 10-11）。ナショナリズムの発生とその拡散を、ある特定のイデオロギー自体の力に還元してしまうことの問題は大きい。また、E・ケドゥーリによればナショナリズムの教義が生まれたのは19世紀初頭であるが、それ以前の1789年に起きたフランス革命はナショナリズムの一例ではないのか。フランス革命がナショナリズムの一例であるとする論者が多いことも、E・ケドゥーリのイデオロギー（ドイツロマン主義）還元論の妥当性を低下させている。

経済的アプローチをとるE・ゲルナーとT・ネアンの主張は、ナショナリズムの由来を人間の経済的唯物主義に求める、経済還元論である。E・ゲルナーによれば、産業社会は、言語と文化が均質になることを可能にするだけでなく、それを要求する。そしてその要求に応えられる唯一の機関は、そのコストの莫大さゆえに、国家によって管理・運営される公的学校教育機関である。そのことから、1つの文化に1つの国家、又は、1つの国家に1つの文化、という状態を求めるナショナリズムが、半ば必然的に生じてくる（E. Gellner 1964 : 158-60）。このように、つまるところナショナリズムは、産業社会が継続的な経済成長をなし得るために必要とされたものであり、その根本的な前提になっているのは、人間（特にエリート）の唯物主義（materialism）である。また、産業化の広がり不均等であるがゆえに、後進地域のインテリやエリートは経済的恩恵を受けられず、もし先進地域での同化に障害がある場合、彼らを中心とした分離独立ナショナリズムへと発展するとされる（E. Gellner 1964 : 164-71）。だがこれも、その前提となっているのは、人間の経済的唯物主義である。

B・オリアリによれば、E・ゲルナーの経済還元論は、「政治の不在」という問題を生み出す。E・ゲルナーのナショナリズム論の中でナショナリストとして描き出されるのは、より稼ぎの良い仕事を求めたり、仕事に

あふれた、唯物的不満を抱えるインテリ・エリートや一般労働者である。だが、歴史的ケースの多くは、それと一致しない。例えば、J・ブルイリーが言うように、産業化が進んでいない社会、つまり産業化に伴う唯物的不満が生じていない社会において、ナショナリズムは猛威をふるい、人々はナショナルな感情を有していた。それは、20世紀におけるアジア・アフリカのナショナリズムを見れば、明らかなように思われる。要するにこのことは、産業化とそれにとまなう唯物的不満が不在でも、ナショナリズムが生じることを意味した。そしてそのような非産業社会におけるナショナリズムは、政治運動としての性質が強いのだと、B・オリアリとJ・ブルイリーは言う (B. O' Leary 1996 : 100-1 ; J. Breuilly 1996 : 162)。E・ケドゥーリもまた、19世紀初頭のドイツ、オスマントルコ崩壊後のギリシャやバルカン諸国などのナショナリズムは、産業化不在の状態で生じたものである、と指摘している。また逆に、20世紀、既に高度な産業化を達成していたドイツ、イタリア、日本などが、第2次世界大戦中に狂信的なまでのナショナリズムを展開させたことは、ナショナリズムが単なる産業化プロセスの付随物ではないことを示している (E. Kedouri 1994 : post-script)。これらのことから言えることは、多くの地域で産業化（およびそれに伴う唯物的不満）不在のままナショナリズムが生じたということ、そして既に高度な産業化が達成された（唯物的恩恵を既に受けている）地域であっても、強力なナショナリズムが発生し、再燃した、ということである。それにも関わらずナショナリズムの由来を経済的な要因に還元するE・ゲルナーの理論は、大きな問題を抱えていると言わざるを得ない。

資本主義の不均衡な発展にナショナリズムの由来を求めるT・ネアンの理論も、E・ゲルナーのそれ同様、唯物主義に立脚した経済還元論である。T・ネアンによれば、資本主義世界の周辺に位置する後進地域のエリートは、その経済的な後進性とそれから来る無力感ゆえに、また、一方で先進

諸国のブルジョワと同じように資本を蓄積し、物質的利益を享受したいと願ったがために、ナショナリズムを展開した。従って、ナショナリズムという現象が最初に現れたのは、19世紀のドイツ、イタリア、日本などの周辺後進地域であり、後にはアジア・アフリカの植民地であった、とT・ネアンは言う。しかし、A・D・スミスによれば、最初のナショナリズムは、イングランドやフランスなどの西ヨーロッパ、又は先進的な「中心部」(the core region)で発生した(A. D. Smith 1998: 54)。更に、A・W・オリッジによれば、カタロニアやバスクなどの地方では、スペインの中でも最も発展した地域だったにもかかわらず、強力なナショナリズムが生じた。ハプスブルク帝国のボヘミア地方、オランダから分離したベルギーについても、それは同じことが言える。また、オスマントルコ帝国の中心部とバルカン地域は、経済的に同じような発展段階にあったにもかかわらず、バルカン諸国はナショナリズムによって独立を果たした(A. W. Orridge 1981: 181-2)。これらが意味することは、T・ネアンが言う「不均等な発展」に由来する、後進地域エリートの反発や唯物的不満からは説明できないナショナリズムが、相当数存在する、ということである。唯物主義に立脚した経済還元論を採用するT・ネアンのナショナリズム論もまた、E・ゲルナーのそれ同様に批判されよう。

J・ブルイリーやM・ヘクターらの政治的アプローチをとる論者もまた、その政治還元論が批判の対象となる。ただし、近代主義論者は全般的に、強調する度合いの差こそあれ、近代国家とナショナリズムを結びつけて考えることから、ナショナリズムをある種の政治的イデオロギーおよび政治的運動として理解する傾向がある。この意味において、近代国家の出現にナショナリズムの由来を求める政治的アプローチは、他の近代主義論者から批判を受け難いのかもしれない。従って、最も強い批判は、A・D・スミスのようなエスノシンボリストから寄せられる。

A・D・スミスは、J・ブルイリーのナショナリズムの定義が政治的側面に限定されていて、ナショナリズムの重要な要素である文化的アイデンティティについて触れられていないことを批判する。確かに、文化的アイデンティティという曖昧な概念を定義の中に持ち込めば、その定義は曖昧かつ不明確になってしまう可能性はある。また、文化的アイデンティティなるものを定義に入れてしまうと、不合理な、原初的絆だとかエスニックな感情といったものが理論の中に入り込んでしまうかもしれない。そうなった場合、ナショナリズムの分析は、困難なものになる。A・D・スミスによれば、J・ブルイリーはそのような事態を避けるために、あえてナショナリズムの政治的側面のみに着目しているのだという。A・D・スミスにとって、文化的アイデンティティは人々を政治的に動員するために必要不可欠なものである。従って、ナショナリズムが目指す目標の1つは、文化的アイデンティティの育成およびその保護である。それは、ある特定の名前を持つ集団の、固有の文化的伝統に根ざすものであり、そのような集団的アイデンティティが存在しない場合、ナショナリストの視点からすれば、正統的なネーションは存在しない。それらのことを考慮すれば、ナショナリズムの定義を政治的側面だけに限定することはできず、もっと包括的なものにならざるを得ない。また、J・ハッチンソンが言うような「文化の刷新」(cultural renewal)や「道徳の再建」(moral regeneration)などの、インテリによる非政治的運動も、ナショナリズムの一形態である、とA・D・スミスは言う。ナショナリズムを単なる政治運動に還元してしまうJ・ブルイリーの定義は、政治的目標とその役割を明らかにしているが、文化的アイデンティティの重要性や、文化の再建といったナショナリズムの文化的側面を除外してしまう、とA・D・スミスは批判する(A. D. Smith 1998: 89-91)。M・ヘクターに関して言えば、国家という単位ではなく、統治(governance)という単位を採用したことにより、必ずしも

国家権力を目指さないナショナリズムの理解が可能になった。しかし、いずれにせよ、領土（国家や州）の政治的支配に向けた権力政治がナショナリズムの原動力である。その意味において、J・ブレイリーと同様の、エスノシンボリストからの批判を受けることになるだろう。

特定の要因を強調する近代主義論者の研究は、単純で明解な因果関係を示すことができるという点で、確かに魅力的ではある。しかし、その特定の要因によって、特定のケースを説明できたとしても、全てのケースを説明することは不可能である。なぜなら、ナショナリズムという分析対象は、そもそも異なる成分によって成り立っているからである。实际的な活動としてのナショナリズムは、権力政治、経済的競争、文学、芸能、オリンピックやワールドカップなどのスポーツ、先住民運動など、様々な形態を取り、ネーションという概念は、国家レベルから個人レベルに至るまで、多層的にイメージされる。還元主義的な説明は、そのようなナショナリズムの多様性を説明することができない。

近代主義者による構造主義・機能主義的説明は、人間の主観、人間相互の間主観、文化・歴史的コンテクストを考慮していない、という批判

構造主義は、ある社会現象を全体的な構造（またはシステム）との関連でとらえ、ある種のモデルを援用してこの構造を示し、それらの社会現象の生起を可能ならしめる構造の分析を重んじる。近代主義の多くの理論は、程度の差こそあれ、構造主義的であると言える。E・ゲルナーは、産業化に由来する、流動性と高文化の普及を要求する社会構造、T・ネアンは、資本主義の世界的な広まりと「不均等な発展」に由来する、格差的社会構造、J・ブレイリーは、近代的な「機能的分業」に由来する、国家と民間社会が分裂した状態（または公的権力と私的権力が分裂した状態）の社会構造、そしてM・ヘクターは、近代中央集権国家の直接支配に由来する、

統治単位とネーションが一致しなくなってしまう状態の社会構造を、モデルとしてそれぞれ示し、その分析を通じてナショナリズム発生メカニズムを明らかにしようとしている。従って、彼らによるナショナリズム発生説明は、構造主義的である。

このような構造主義的な説明の問題点は、まず、エリート（より一般的には人々）の行動が、客観的合理性に基づいて利益の追求をしていると仮定されていることである。構造は、多かれ少なかれ、人々の行動範囲を制限する。その構造に由来する制限の中で、人々は様々な行動の可能性を探る。結局人々がどのように行動するかは、合理的に決定されるが、その決定は、純利益（net benefit）の追求を前提としている。従って、エリートの行動は、E・ゲルナーとT・ネアンに従えば、経済的純利益を追求するために、また、J・ブルイリーとM・ヘクターに従えば、政治的純利益（権力）を追求するために、合理的に決定される。そしてその合理的に決定された行動の行き着く先が、ナショナリズムという政治原理であり運動である、ということになる。近代主義者が主張していることは、内容は異なるが、その説明方法は似通っている。つまり、エリートは、近代的社会構造に対応し、その中で自らの利益を合理的に追求しようとするため、社会構造のあり方が彼らの行動（ナショナリズムの展開）を決定する、という説明方法を彼ら近代主義者はとるのである。ここで問題になるのは、エリートが本当に追求しているのは経済的利益（E・ゲルナーとT・ネアン）か、それとも政治的利益（J・ブルイリーとM・ヘクター）のどちらなのか、ということもあるが、彼らの行動が、社会構造と照らし合わせて、本当に合理的に決定されているか、ということである。

社会構造は、ある行動を可能にし、ある行動を不可能にする。だから確かに、社会構造によって人々の行動は左右されるであろう。しかし、それにしても、その「社会構造」を認識するのは人々の主観であり、その主観

の違いによって、同じ社会構造の中でも人々の行動は多様になる。また、人々相互の間主観的な公正さや価値観といったものも、人々の行動に影響を与えるに違いない。K・ミノグが言うように、人々は、彼らが認識するところの状況に、多様に、しかし彼らなりの合理性をもって、対応しながら行動を決定する（K. Minogue 1996：117）。当然のことながら、「彼らが認識するところの状況」は、彼らの主観・間主観に基づく、個人的、および集団的な物事の考え方やイデオロギーによって大きく左右される。従って、「彼らなりの合理性」というものも、彼らの主観・間主観によって大きく左右される。更に言えば、文化的・歴史的コンテキストの違いによって、異なるイデオロギーが同じ結果をもたらし、同じイデオロギーが異なる結果をもたらし得ることもあろう。構造主義の問題は、社会構造が創り出す環境に応じて人間の行動パターンが決まると仮定する際に、そのような人々の多様な認識や主観・間主観、そして文化・歴史的コンテキストを、その説明の中に取り込むことができないところにある。

更に、構造的要因以外の様々な要因が絡み合いナショナリズムが生じるのだということは、還元主義批判でも見てきたとおり、確かであろう。国家権力の増大や資本主義の世界的な広まりに関連する構造的な要因は、その機会をつかもうとするナショナリストの言説に利用される環境を創り出すかもしれない、とC・カルホーンは構造的要因の影響を認める。しかし、ナショナリズムの言説は、固有の歴史や文化、国家エリートの権力闘争、そして民間社会の動向など、様々な要因が部分的に絡み合い、その中から生まれるものである。従って、ナショナリズムの言説は、構造的要因から部分的に独立しており、構造的要因とはまったく異なる要因と結びついているのである（C. Calhoun 1997：21）。ならば、社会構造が創り出す環境に応じて人間（エリート）の行動パターンが決まると仮定する構造主義的説明は、部分的に正しいが、不完全であると言える⁽²³⁾。ここで主張した

いことは、総合的に考えることが大切である、ということである。構造やシステムは、確かに人々の行動を左右する。しかし、人々の行動は、構造によって機械的に決まるわけではない。人々の主観・間主観、イデオロギー、そして文化・歴史的コンテキストは、人々の行動やエリートの政治に大きな影響を与え、構造やシステムから予測できない結果をもたらすことも、多々あるのである。

構造主義と関連して、その機能主義的説明も、近代主義が批判される対象となっている。機能主義は、社会現象を、全体的な構造（またはシステム）の存続にとって必要な、機能的前提条件（functional prerequisite）であるとする。従って、機能主義は、社会現象の具体的な状態を、全体的な構造の存続維持にとっての機能的な有効性によって説明しようとする。E・ゲルナーは、まさにこのような機能主義的説明をする。E・ゲルナーによれば、産業化は、標準化された高文化を必要とし、それを人々全員が習得することを要求する。その要求は、公的教育機関によってのみ満たされる。だが、標準化された高文化を創出するような公的教育機関は、その巨大なコストゆえに、国家によって管理・運営されなければならなかった。このようにして、ナショナル（文化的）な単位は国家を必要とし、国家はナショナルな単位を必要とするようになった（E. Gellner 1964：155-7）。産業化は、ナショナルな単位と国家を一致させようとする機能をもつナショナリズムを、必要とするようになったのである。このようにE・ゲルナーは、ナショナリズムを、産業社会の存続にとって必要な機能的前提条件であると考え、その機能的な有効性によってナショナリズムを説明しようとするのである。機能主義的な説明をするのは、E・ゲルナーだけではない。T・ネアンもまた、ナショナリズムは近代社会に暮らす人々が必要とする大衆文化というものを供給する機能を果たすから、近代化の中で階級闘争ではなくナショナリズムが台頭したのだ、と機能主義的な説明をして

いる (T. Nairn 2003 [1977] : 342)。

これらの機能主義的な説明の問題点は、ナショナリズム発生とそれが果たす機能の、逆転した因果関係である。時系列的に見れば、ナショナリズムの発生が先にあって、後にナショナリズムの機能（高文化または大衆文化の創出）が現れるはずで、その逆ではない。ならば、ナショナリズムが果たす機能（結果）によって、ナショナリズムの発生（原因）を説明しようとする試みは、論理的に大きな問題があると言わざるを得ない。ナショナリズムの発生（原因）によって、それが果たした機能（結果）を説明することは可能だが、それは後者の説明であって、前者の説明ではない。ナショナリズムの発生を説明するには、それを1つの結果と見なし、その原因を明らかにしなければならない。機能主義的な説明では、因果関係上、それをすることはできない (K. O' Leary 1996 : 85-7 ; K. Minogue 1996 : 117)。

E・ゲルナーの機能主義的説明を批判したK・オリアリは、エリートの主観・間主観を考慮することによって、E・ゲルナーのナショナリズム論を修正できると考える。それによれば、以下のような説明に修正される。産業化（近代化）を推し進めたいエリートたちは、ナショナリズムが産業化の成功にとって不可欠であると、実は信じていた。ナショナリズムは、経済発展を妨げるような伝統や宗教の弊害を打ち砕き、建設的な経済的活力を引き出すだろうと考えた。エリートたちは、ナショナリズムが産業化の成功にとって有益であると、実は認識し、その言説が彼らの間で力を得ていたのである。だから、エリートたちは、ナショナリズムを展開したのだ。このような、エリートたちの主観・観主観を考慮した説明なら、ナショナリズムがなぜエリートたちによって履行されたか、説明できることになる (K. O' Leary 1996 : 86)。

ナショナリズムと産業発展の因果関係を信じていたエリートたちの例と、

その言説を見つけることは、恐らくそんなに難しいことではないだろう（例えば日本の明治初期のエリートたち）。そうなれば、E・ゲルナーのナショナリズム論は、機能主義的ではなくなり、受け入れられるものとなる。しかし一方で、ナショナリズムと軍事強化、ナショナリズムと地政学的安全保障、ナショナリズムと国内政治問題など、様々な因果関係を信じていたエリートたちの例を見つけることも可能であろう。このことは、E・ゲルナーのナショナリズム論、又は一般的に機能主義的説明は、もし仮に上記のように修正されたとしても、ある特定のケースしか説明できない、ということの意味する。いづれにしても、エリートや人々の主観・間主観、イデオロギー、権力政治、そして彼らが直面している文化的・社会的コンテクストを考慮し、それらによってナショナリズム発生メカニズムを明らかにしなければならないのである。

近代主義の理論は、民衆の感情や共鳴を十分に説明できない、という批判

近代主義論者の多くは、民衆がエリート（ナショナリズムの指導者）たちに共鳴し、動員されると仮定する。しかし、エリートに対する民衆の支持は、単に仮定することはできない。なぜなら、実際上のナショナリズムは、これまで見てきたように、その内容から言って実に様々な形態をとっているからである。エリートの訴えに対し、なぜ民衆が共鳴するのか、という問いは、それぞれのケースを見て、ケースごとの説明を必要とする。

近代主義論者のナショナリズム論は、なぜ民衆がネーションのために彼らの命を投げ出すような犠牲を払うのか説明できない、とA・D・スミスは言う。A・D・スミスによれば、近代主義論者は、民衆が、エリートによって道具・手段的に自在に操作されるという、道具・手段主義（instrumentalism）的な説明をしがちである。それは、所謂「トップダウン方式」の説明である。結果としてそれは、民衆の利益や希望、欲しているこ

とをほとんど考慮しない説明になっている (A. D. Smith 1995 : 40)。それに加え、民衆の利益や欲していることが、階級、性別、宗教、エスニシティ、人種、文化的背景などによっても異なることを考えれば、トップダウン方式の説明ではなおさら、なぜ (全体としての) 民衆がエリートに共鳴するのかを説明できないだろう。

E・ゲルナーを例にとれば、なぜ民衆が高文化というものに熱心に自己同一化しようとするのか、という疑問が湧いてくる。E・ゲルナーはしばしば、高文化というものが人為的に創出されたものであることを強調する。しかし、なぜ民衆はその「作り事」(an invention) に共鳴し、命さえ投げ出すのか、と A・D・スミスは疑問を投げかける (A. D. Smith 1996 : 134)。しかも、その新しい高文化は、古くからある低文化とほとんど関係はなく、近代に入ってから、エリートによって意識的に選別され、かつ過激に改造され、上から下へ押し付けられたものである。そのような高文化に対し、産業社会に由来する経済的動機があるにせよ、民衆が忠誠心を抱き、犠牲を払うほどの感情を抱くであろうか。それをただ単にそうであると仮定するのは、問題があると言わざるを得ない⁽²⁴⁾。

人間が行動するとき、一般的には2つの動機が働くものである、と K・ミノグは言う。1つは、何か欲するものを得ようとするときであり、1つは、大切に思うアイデンティティ (自己同一化した人、集団、文化など) を守ろうとするときである。E・ゲルナーが考えるナショナリズムは、前者の動機によって生じるもので、根本的にそれは社会を変革するための道具・手段であり、それによってエリートや民衆の唯物的欲求を満たすためのものである。一方、イデオロギーとしてのナショナリズムは、主に後者の動機によって生じるもので、公然とした、アイデンティティの発見と育成に関わるものである。E・ゲルナーのナショナリズム論に欠けているのは、アイデンティティに関する人々の思いや、それを守りたいと思う

人々の感情である。アイデンティティに関する人々の思いや感情は、確かにE・ゲルナーが言うように「間違った意識」(false consciousness)かもしれないが、人間の実際の行動を理解する上で、無視できるものではない。命を投げ出すような大きな犠牲を払うことに関して言えば、唯物的利益よりも、アイデンティティに関する思いや感情の方がむしろ大きな影響力を持つと考えるのが普通である(K. Minogue 1996: 126-7)。アイデンティティと、それに対する民衆の思いを考慮しないE・ゲルナーの理論では、民衆がなぜエリート(ナショナリスト)に共鳴し、時として大きな犠牲を払うのか、十分に説明できない。

J・ブルイリーとM・ヘクターのナショナリズム論もまた、その道具・手段主義に対する批判を免れないだろう。J・ブルイリーにとって重要なことは、ナショナリズムを、国家権力の獲得と行使というエリートの目的に結び付けて考えることである。従って、文化やアイデンティティはナショナリズムの一側面を示すものではあるが、エリートの権力政治との関係においてのみ、考慮されるべきものである(J. Breuilly 1996: 163)。エリートは、彼らのナショナリズム運動を展開するにあたって、様々な社会集団から支持を得なければならなかったが、それは、「ナショナリストのレトリック」を通じて民間社会の文化的一体性を強調し、そこから意図的に文化的アイデンティティを創出し、それにアピールすることによって達成された。それらの文化的一体性や文化的アイデンティティは、J・ブルイリーにとって、エリートたちが創り上げた、民衆に対する「巧妙なごまかし」(a sleight of hand)である。その「ごまかし」の政治レトリックによって、民衆はエリートに共鳴し、動員される、という(J. Breuilly 1996: 165-6)。また、M・ヘクターによれば、国家建造ナショナリズムを先導するエリートは、国歌、国旗、国歌記念碑、国家行事、国家の祝日や祭日など、「新しい伝統」を活発に創出することによって、それまで地方に向け

られていた民衆の忠誠心とアイデンティティを国家に向けさせる、という（M. Hechter 2000：62-4）。これらの説明を見て明らかなことは、エリートたちによる「ごまかし」の政治レトリックや「新しい伝統」の創出が、トップダウン方式で、民衆の心に響き、共鳴を生じさせるであろう、とJ・ブレイリーとM・ヘクターが仮定していることである⁽²⁵⁾。このような説明の問題は、先にも述べた通り、「ごまかし」や「新しい伝統」に対し、民衆が無条件に共鳴すると仮定して良いのだろうか、というものである。民衆がエリートの「でっちあげたネーション」に対して自己同一化するにしても、その同一化は、単に仮定するだけではなくて、それ自体の説明を必要とし、それぞれのケースを見て明らかにされなければならないのではないか。また、エリートがその「でっちあげたナショナリティ」に訴えかけることによって民衆を動員できるとしても、その動員は、単に仮定するだけではなく、それ自体の説明を必要とし、それぞれのケースを見て明らかにされなければならないのではないか。民衆が共鳴し、動員されることを単に仮定することによって成り立っている、トップダウン方式の道具・手段主義的説明は、明らかに民衆の共鳴を説明しきれていないと言える。

民衆の共鳴に関して、古くから存在する伝統や文化との関わりを認めるのがE・ケドゥーリとT・ネアンである。E・ケドゥーリは、エリートたちが土着の神や儀式（dark gods and their rites）を賛美し、そこから湧き出て来る感情を利用して民衆を動員したことを示した（E. Kedouri 1970：76）。T・ネアンは、後進地域のエリートが民衆を動員する際に、土着の伝統に訴えかけて、しばしば病的とも言えるエスニズムに傾倒していったことを示した（T. Nairn 2003〔1977〕：336）。E・ケドゥーリとT・ネアンからすれば、土着の伝統やエスニシティは、民衆を動員する際に、必要不可欠なものである。その意味で、民衆の共鳴の問題に対する彼らの答

えは、エスノシンボリズムのそれに一步近いものとなる。しかし、一方でそれらの伝統は、エリートが政治的に利用するために、元々の意味とは違った形で民衆の前に提示されるであろう (transvaluation of values)、とする点において、E・ケドゥーリの説明は道具・手段的である (E. Kedouri 1970 : 37)。T・ネアンもまた、「過去」や「ナショナルヒストリー」なるものが実は捏造された架空のものであり、エリートたちはそれに訴えかけることによって民衆を動員しようとした (T. Nairn 2003 [1977] : 328)、と考える点でやはり道具・手段主義である。ならばE・ケドゥーリとT・ネアンもまた、民衆の共鳴の問題に関して、「エリートによる操作」というトップダウン方式の説明に頼ることになる。

「民衆がなぜ共鳴するのか」ということを理解するには、エリートの役割に加え、「ボトムアップ方式」の分析手法が必要である。C・カルホーンが言うように、ナショナリズムはエリート政治だけではなく、大衆文化や自己アイデンティティのあり方が大きく関係している。国家に関する言説は理屈や利益といった形で表現されるが、ネーションに関する言説は、情熱やアイデンティティといったものと共に表現される。ナショナリズムが、理屈や利益を超えた、感情的な力を伴うのは、それが、部分的であれ、人々のアイデンティティを形づくり、芸術家やインテリを鼓舞し、人々と歴史を結びつけるからである (C. Calhoun 1997 : 3)。ならば、ナショナリズムと民衆の共鳴を理解するには、民衆レベルでの文化やアイデンティティに関する言説を分析することが必要であろう。これまで見てきた近代主義論者の分析に欠けているのは、まさにそのようなボトムアップ方式の分析手法であると言える。

近代主義の理論は、現代におけるナショナリズムの再来を説明できない、という批判

近代主義論者のナショナリズム論は、近代化との関係からナショナリズムの原因を明らかにしようとするものである。従って近代主義論者は、近代化プロセスの中にある様々な地域、例えばヨーロッパであれば18世紀から19世紀にかけて、また、アジア・アフリカであれば19世紀から20世紀にかけて、におけるナショナリズムの由来を、様々な理論によって説明してきた。近代化プロセスがナショナリズムの由来であるなら、近代化プロセスが終了すればナショナリズムはもう生じないはずである。だが、問題は、近代化を既に達成してしまった地域において、ナショナリズムが繰り返し再来し続けていることである。第2次世界大戦中のドイツ、イタリア、日本では、近代的中央集権国家体制と資本主義産業社会が既にある程度成熟していたにもかかわらず、19世紀に1度経験したはずのナショナリズムが凄まじい勢力をもって再来した。また、20世紀後半に見られるような、スコットランド、ウェールズ、バスク、カタロニア、ケベック、フランドル、キプロスなどの地域、また近年であればソ連崩壊後の東欧、旧ユーゴスラビアなど、近代化のプロセス自体とは到底関連づけられないようなナショナリズムが、再来を繰り返している。更に言えば、映画やポップミュージック、または、オリンピックやワールドカップにおけるナショナルアイデンティティの高揚、そして政治や経済に関する反日・反米・反中国などの民衆デモに至るまで、繰り返し再来するそれらの感情や運動がナショナリズムの一側面であるとするなら、近代化プロセスとの関連だけでそれらを説明することは到底不可能なように思われる。

M・ビリッグが言うように、ナショナリズムは日常的に、再生産され続けているから、繰り返し表面化するのだと考えるべきであろう (M. Billig 1995)。近代主義論者は、1度ナショナリズムが生じると、ネーションや

ナショナリティを何か当然そこに存在し続けるものとして扱っているように思われる。また、ナショナリズムというものが、ネーションを創り出すプロセス（例えば分離独立闘争）や、ネーションが危機に瀕している「非常時」にだけ生じてくる現象だと捉える傾向がある。しかし、E・ルナンがかつて言ったように、ネーションとは「日々の投票」によって存在するのであり、M・ビリッグが言うように、人々は日々の「ありふれたナショナリズム」(banal nationalism) によって自らのナショナリティをほぼ無意識に再確認し、それによってネーションは再生産(reproduce)され続けるのである。例えば、役所に掲揚された国旗、メディアや政治家が使う「我々」や「国民」といった言葉は、無意識の内に、人々に彼らのナショナリティを日々連想させる「ありふれたナショナリズム」の表れである。それらの「ありふれたナショナリズム」は、あまりにもありふれていて、日々の生活に織り込まれているため、人々はほとんど意識しないようなものである。現代におけるナショナリズムは、このような「ありふれたナショナリズム」に基づくイデオロギー的土台があるからこそ、世界各地で、近代化を既に達成した国や地域であろうとも、再来し続けるのである。近代主義論者の理論には、このような、人々の日常生活と密接に絡み合ったイデオロギー的言説が組み込まれていない。その結果として、近代主義論者のナショナリズム論は、現代において繰り返されるナショナリズムの再来を、うまく説明できないでいる。

英語文献

Alter, P. (1994) *Nationalism* (2nd ed.), London: Edward Arnold.

Anderson, B. (1991) [1983] *Imagined Community*, rev. ed, London: Verso.

Armstrong, J. (1982) *Nations before Nationalism*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.

Barth, F. (ed.) (1969) *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture*

- Difference*, Boston: Little Brown.
- Bauer, O. (1995) 'The Nationalities Question and Social Democracy', *The Nationalism: Reader*, in O Dahbour and M. R. Ishay (ed.), NJ: Humanities Press International, 183-91.
- Bauer, O. (1996) 'The Nation', in S. Woolf (ed.), *Nationalism in Europe 1815 to the present*, London: Routledge, 48-61.
- Beck, U. (2002) *Macht und Gegenmacht im Globalen Zeitalter: Neue weltpolitische Okonomie*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (島村賢一訳『ナショナリズムの超克—グローバル時代の世界政治経済学』NTT 出版、2008年)
- Beiner, R. (1999) *Theorizing Nationalism*, NY: State University Press.
- Bell, D. (1975) 'Ethnicity and Social Change', in Glazer, N. and Moynihan, P. *Ethnicity: Theory and Experience*, Cambridge: Harvard University Press.
- Berger, P. and Luckmann, T. (1967) *The Social Construction of Reality*, London: Allen Lane Penguin.
- Bhabha, H. (ed.) (1990) *Nation and Narration*, London: Routledge.
- Billig, M. (1995) *Banal nationalism*, London: Sage.
- Bonacich, E. (1972) 'A theory of ethnic antagonism: The split labor market', *American Sociological Review*, 41, 547-51.
- Brand, J. A. (1985) 'Nationalism and the Noncolonial Periphery: A Discussion of Scotland and Catalonia', in E. A. Tiryakian and R. Rogowski (eds.), *New Nationalisms of the Developed West*, Boston: Allen & Unwin, 277-93.
- Brass, P. (1979) 'Elite groups, symbol manipulation and ethnic identity among the Muslims of South Asia', in David Taylor and Malcolm Yapp (eds.) *Political Identity in South Asia*, Dublin: Curzon Press, 35-77.
- Brass, P. (1991) *Ethnicity and Nationalism: Theory and Comparison*, New Delhi: Sage.
- Breuilly, J. (2006) 'introduction' in Gellner, E. *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell, 2nd edn.
- Breuilly, J. (1993 [1982]) *Nationalism and the State*, Manchester: Manchester University Press, 2nd edn.
- Breuilly, J. (1996) 'Approaches to Nationalism', in G. Balakrishnan (ed.), *Mapping the Nation*, London: Verso, 146-74.
- Breuilly, J. (2001) 'The State and Nationalism', in M. Guibernau and J. Hutchinson (eds.), *Understanding Nationalism*, Cambridge: Polity Press, 32-35.
- Breuilly, J. (2005) 'Dating the nation: how old is an old nation?', in A. Ichijyo and G. Uzelać (ed.), *When is the Nation?*, London: Routledge, 15-39.

- Breuilly, J. 1996 (1985) 'Reflections on Nationalism', in S. Woolf (ed), *Nationalism in Europe 1815 to the present: A reader*, in O Dahbour and M. R. Ishay (ed.), NJ: Humanities Press International, 137-54. Originally in (1985) *Philosophy of the Social Sciences*, 15, 65-75.
- Brubaker, R. (1992) *Citizenship and Nationhood in France and Germany*, MA: Harvard University Press.
- Brubaker, R. (1996) *Nationalism Reframed*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Brubaker, R. (2002) 'Ethnicity without Groups', *Archives Europeenes de Sociologie*, 43(2), 163-89.
- Brubaker, R. and Cooper, F. (2000) 'Beyond Identity', *Theory and Society*, 29, 1-47.
- Calhoun, C. (1993) 'Nationalism and Ethnicity', *Annual Review of Sociology*, 19, 211-39.
- Calhoun, C. (1997) *Nationalism*, Buckingham: Open University Press.
- Castles, S. (2005) 'Citizenship and the Other in the Age of Migration', in Spencer, P. and Wollman, H. (eds.), *Nations and Nationalism: A Reader*, New Jersey: Rutgers University Press, 301-16.
- Chatterjee, P. (1986) *Nationalist Thought and the Colonial World: A Derivative Discourse?*, New Jersey: Zed Books.
- Chatterjee, P. (1996) 'Whose Imagined Community?', in G. Balakrishnan (ed.), *Mapping the Nation*, London: Verso, 214-25.
- Cohen, A. (ed.) *Urban Ethnicity*, London: Tavistock.
- Connor, W. (1994) *Ethno-Nationalism: The Quest for Understanding*, Princeton NJ: Princeton University Press.
- Connor, W. (2004) 'The timelessness of nations', in Montserrat Guibernau and John Hutchinson (eds.) *History and National Destiny: Ethnosymbolism and its Critics*, Oxford: Blackwell Publishing, 35-48.
- Conversi, D. (2007) 'Mapping the Field: Theories of Nationalism and the Ethnosymbolic Approach', in Athena S. Leoussi and Steven Crosby (eds.) *Nationalism and Ethnosymbolism: History, Culture and Ethnicity in the Formation of Nations*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 15-30.
- Cox, O. (1948) *Caste, Class and Race*, NY: Doubleday.
- Dawkins, R. (1976) *The Selfish Gene*, London: Oxford University Press.
- Day, G. and Thompson, A. (2004) *Theorizing nationalism*, NY: Palgrave.
- Derrida, J. (1981) *Writing and Difference*, London: Routledge.
- Deutsch, K. (1966) *Nationalism and Social Communication*, 2nd edn, NY: MIT Press.
- Durkheim, E. (1964) *The Division of Labour in Society*, trans. G. Simpson, NY: Free Press.

- Eley G. and R. G. Suny (1996) 'Introduction: From the Moment of Social History to the Work of Cultural Representation', in G. Eley and R. Suny (ed.), *Becoming National: A Reader*, NY: Oxford University Press, 3-38.
- Eller, J. and R. M. Coughlan (1993) 'The Poverty of Primordialism: The Demystification of Ethnic Attachments', *Ethnic and Racial Studies*, 16(2), 183-201.
- Eriksen, T. H. (1993) 'Formal and Informal Nationalism', *Ethnic and Racial Studies*, 16 (1), 1-25.
- Eriksen, T. H. (1999) 'A Non-ethnic State for Africa? A Life-world Approach to the Imagining of communities', in P. Yeros (ed.), *Ethnicity and Nationalism in Africa: Constructivist Reflections and Contemporary Politics*, Basingstoke and New York: Palgrave, 45-64.
- Eriksen, T. H. (2000) [1993] *Ethnicity and Nationalism*, London: Pluto.
- Fenton, S. (1999) *Ethnicity: Racism and Culture*, Maryland: Rowman and Littlefield.
- Fenton, S. (2003) *Ethnicity*, Cambridge: Polity Press.
- Foucault, M. (1981) 'The Order of Discourse' (trans. By I. Mcleod), in R. Young (ed.), *Untying the Text: A Poststructuralist Reader*, Boston and London: Routledge & Kegan Paul, 51-78.
- Foucault, M. (2002 [1972]) *The Archaeology of Knowledge*, London: Routledge.
- Francis, K. (1974) *Interethnic Relations*, NY: Elsevier.
- Gans, J. (1979) 'Symbolic ethnicity: The future of ethnic groups and cultures in America', *Ethnic and Racial Studies*, 2, 2, 1-20.
- Geertz, C. (1963) *Old Societies and New States*, NY: Free Press.
- Geertz, C. 1993 (1973) *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*, London: Fontana, 2nd edn.
- Gellner, E. (1964) *Thought and Change*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- Gellner, E. (1983) *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell.
- Gellner, E. (1988) *Plough, Sward and Book*, London: Collins Harvill.
- Gellner, E. (1995) *Encounter with Nationalism*, Oxford: Blackwell.
- Gellner, E. (1996) 'Reply: Do Nations Have Navels?', *Nations and Nationalism*, 2(3), 366-71.
- Gellner, E. (1996) 'The Coming of Nationalism and its Interpretation: The Myths of Nation and Class', in G. Balakrishnan (ed.), *Mapping the Nation*, London: Verso, 98-145.
- Gellner, E. (1997) *Nationalism*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- Gergen, K. J. (1982) *Towards Transformation in Social Knowledge*, New York: Springer Verlag.

- Gergen, K. J. (1994) *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Gergen, K.J. (1999) *An Invitation to Social Construction*, London: Sage.
- Giddens, A. (1984) *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity Press.
- Giddens, A. (1985) *The Nation State and Violence*, Cambridge: Polity Press.
- Giddens, A. (1987: 1972) *Durkheim on Politics and the State*, London: Fontana Paperbacks.
- Glazer, N. and Moynihan, P. (1975) *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge: Harvard University Press.
- Greenfeld, L. (1992) *Nationalism: Five Roads to Modernity*, MA: Harvard University Press.
- Grosby, S. (1994) 'The verdict of history: the inextinguishable ties of primordiality', *Ethnic and Racial Studies*, 17, 164-171.
- Grosby, S. (1995) 'Territoriality: the transcendental, primordial feature of modern societies', *Nations and Nationalism*, 1(2), 143-62.
- Grosby, S. (2005) 'The primordial, kinship and nationality', A. Ichijyo and G Uzelac (ed.), *When is the Nation?*, London: Routledge, 79-85.
- Grosby, S. (2005) *Nationalism: A Very Short Introduction*, NY: Oxford University Press.
- Guibernau, M. (1996) *Nationalisms: The Nation State and Nationalism in the Twentieth Century*, Cambridge: Polity Press, ch. 1.
- Guibernau, M. (1999) *Nations without States*, Cambridge: Polity Press.
- Guibernau, M. (2004) 'Anthony D. Smith on nations and national identity: a critical assessment', in Montserrat Guibernau and John Hutchinson (eds.) *History and National Destiny: Ethnoscience and its Critics*, Oxford: Blackwell Publishing, 125-42.
- Habermas, J. (1992) 'Citizenship and National Identity - Some Reflections on the Future of Europe', *Praxis International*, 12(1), 1-19.
- Hall, J. (1993) 'Nationalisms: Classified and Explained', *Daedalus*, 122(3), 1-28
- Hall, J. (ed.) (1998) *The State of the Nation*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, J. and I. Jarvie (eds.) (1996) *The Social Philosophy of Ernest Gellner*, Atlanta and Amsterdam: Rodopi.
- Hall, S. (1987) 'Minimal Selves', in *Identity: The Real Me*, ICA Document 6, London: Institute for Contemporary Arts.
- Hall, S. (1990) 'Cultural identity and diasporas', in Tutherford, J. (ed.), *Identity*, London: Lawrence and Wishart.
- Hall, S. (1992) 'The new ethnicities', in J. Donald and A. Rattansi (eds.) *Race, Culture, and*

- Difference*, London: Sage, 256-8.
- Hall, S. (1992) 'The Question of Cultural Identity', in Hall, S. Held, D. and McGrew, T. (eds.), *Modernity and Its Futures*, Cambridge: Polity Press.
- Hall, S. (1992) 'The West and the Rest', in Hall, S. Held, D. and McGrew, T. (eds.), *Formations of Modernity*, Cambridge: Polity Press, 276-330.
- Hall, S. (1996) 'Ethnicity: Identity and Difference', in G. Eley and R. G. Sunny (eds.), *Becoming National: A Reader*, New York and Oxford: Oxford University Press.
- Hall, S. (1996) 'Introduction: Who Needs "Identity"?', in S. Hall and P. du Gay (eds.), *Question of Cultural Identity*, London: Sage.
- Hastings, A. (1997) *The Construction of Nationhood, Ethnicity, Religion and Nationalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hays, J. H. (1933) *Essays on Nationalism*, New York: Macmillan.
- Hearn, J. (2006) *Rethinking Nationalism*, NY: Palgrave.
- Hechter, M. (2000) *Containing Nationalism*, Oxford: Oxford University Press.
- Hechter, M. (1975) *Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966*, London: Routledge.
- Hechter, M. (1985) 'Internal Colonialism Revisited', in E. A. Tiryakian and R. Gogowski (eds.), *New Nationalisms of the Developed West*, Goston: Allen & Unwin, 17-26.
- Hechter, M. and M. Levi (1979) 'The Comparative Analysis of Ethnoregional Movements', *Ethnic and Racial Studies*, 2(3), 260-74.
- Held, D. (2005) 'Culture and Political Community—Nation, Global and Cosmopolitan', in Spencer, P. and Wollman, H. (eds.), *Nations and Nationalism: A Reader*, New Jersey: Rutgers University Press, 317-27.
- Held, D., et al. (1999) *Global Transformations— Politics, Economics and Culture*, Cambridge: Polity Press.
- Hobsbawm, E. (1990) *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hobsbawm, E. (1995) 'Nationalism in the Late Twentieth Century', in O. Dahbour and M. R. Ishay (ed.), *The Nationalism: Reader*, NJ: Humanities Press International, 362-72.
- Hobsbawm, E. (2005) 'Comment on Steven Crosby: the primordial, kinship and nationality', in A. Ichijyo and G. Uzelac (ed.), *When is the Nation?*, London: Routledge, 79-85.
- Hobsbawm, E. 1996 (1992) 'Ethnicity and Nationalism in Europe Today', in G. Balakrishnan (ed.), *Mapping the Nation*, London: Verso, 255-66.
- Hobsbawm, E. and Ranger, T. (eds.) (1983) *The Invention of Tradition*, Cambridge:

- Cambridge University Press.
- Holton, R. (1998) *Globalization and the Nation-State*, Basingstoke: Macmillan.
- Horowitz, D. L. (1985) *Ethnic Groups in Conflict*, CA: University of California Press.
- Hroch, M. (1985) *Social Precondition of National Revival in Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hroch, M. (1995) 'National Self-Determination from a Historical Perspective', in S. Periwal (ed.), *Notions of Nationalism*, Budapest: Central European University Press, 65-82.
- Hroch, M. (1996) 'Nationalism and National Movements: Comparing the Past and the Present of Central and Eastern Europe', *Nations and Nationalism*, 2(1), 35-44.
- Hroch, M. (1997) 'Real or Constructed: The Nature of the Nation', in J. A. Hall (ed.), *The State of the Nation: Ernest Gellner and the Theory of Nationalism*, Cambridge: Cambridge University Press, 91-106.
- Hroch, M. 1996(1993) 'From National Movement to the Fully-Formed Nation: The Nation Building Process in Europe', in G. Eley and R. Suny (ed.), *Becoming National: A Reader*, NY: Oxford University Press, 60-79.
- Hutchinson, J. (1987) *The Dynamics of Cultural Nationalism: The Gaelic Revival and Creation of the Irish Nation State*, London: Allen and Unwin Press.
- Hutchinson, J. (1994) *Modern Nationalism*, London: Fontana Press.
- Hutchinson, J. (2000) 'Ethnicity and modern nations', *Ethnic and Racial Studies*, 23(4), 651-69.
- Hutchinson, J. (2001) 'Nations and culture', in Montserrat Guibernau and John Hutchinson (eds.), *Understanding Nationalism*, Bampton: Polity, 74-96.
- Ignatieff, Michael. (1993) *Blood and belonging: Journeys into the new nationalism*, New York: Farrar, Straus, Giroux. (幸田敦子訳 (1996) 『民族はなぜ殺しあうのか』河出書房新社。)
- J. A. Hall (ed.) (1998) *The State of the Nation: Ernest Gellner and the Theory of Nationalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- J. A. Hall and I. Jarvie (eds) (1996) *The Social Philosophy of Ernest Gellner*, Atlanta and Amsterdam: Rodopi.
- James, P. (1996) *Nation Formation: Towards a Theory of Abstract Community*, London: Sage, ch. 5.
- Jenkins, R. (1997) *Rethinking Ethnicity*, London: Sage.
- Kasfir, N. (1979) 'Explaining ethnic political participation', *World Politics*, 31, 365-88.
- Kedourie, E. (1966 [1960]) *Nationalism*, London: Hutchinson, 3rd edn.

- Kedourie, E. (1970) *Nationalism in Asia and Africa*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- Kedourie, E. (1994) [1960] *Nationalism*, Oxford: Blackwell, 4th edn.
- Keyes, F. (1976) 'Towards a new formulation of the concept of ethnic group', *Ethnicity*, 3 (3): 202-13.
- Kohn, Hans (2005) [1944] *The Idea of Nationalism: A Study in Its Origins and Background*, New York: The Macmillan Company.
- Kuzio, T. (2002) 'The myth of the civic state: a critical survey of Hans Kohn's framework of understanding Nationalism', *Ethnic and Racial Studies*, 25(1), 20-39.
- Kymlicka, W. (1995) *Multicultural Citizenship*, Oxford: Oxford University Press.
- Kymlicka, W. (1999) 'Misunderstanding Nationalism', in R. Beiner (ed.), *Theorizing Nationalism*, NY: State University of New York Press, 131-40.
- Lijphart, A. (1977) *Democracy in Plural Societies-A comparative Exploration*, New Haven, CT: Yale University Press.
- Mann, M. (1995) 'A Political Theory of Nationalism and its Excesses', in S. Perival (ed.), *Notions of Nationalism*, Budapest: Central European University Press, 147-70.
- Mann, M. (1996) 'The Emergence of Modern European Nationalism', in J. A. Hall and I. Jarvie (eds.), *The Social Philosophy of Ernest Gellner*, Atlanta and Amsterdam: Rodopi, 147-70.
- Marx, K. (1995) 'Manifesto of the Communist Party', in O. Dahbour and M. R. Ishay (ed.), *The Nationalism: Reader*, NJ: Humanities Press International, 178-83.
- McClingtock, A. (1996) "'No Longer in a Future Heaven": Nationalism, Gender, and Race', in G. Eley and R. Suny (ed.), *Becoming National: A Reader*, NY: Oxford University Press, 260-85.
- Meincke, Friedrich. (1970) *Cosmopolitanism and the Nations State*, 7th ed., Robert B. Kimber, Trans, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Mill, John Stuart (1861) *Considerations on Representative Government*, London: Parker, Son & Bourne.
- Millar, D. (1995) *On Nationality*, Oxford: Oxford University Press.
- Mills, S. (1997) *Discourse*, London: Routledge.
- Moruzzi, N. C. (1994) 'A Problem with Headscarves: Contemporary Complexities of Political and Social Identity', *Political Theory*, 22 (4), 653-72.
- Munck, R. (1986) *The Difficult Dialogue: Marxism and Nationalism*, London: Zed Books.
- Nagel, J. (1993) 'Constructing ethnicity: creating and recreating ethnic identity and culture', in Norman Yetman (ed.), *Majority and Minority: The Dynamics of Race and Ethnicity in American Life*, 6th ed., MA: Allyn and Bacon.

- Nagel, J. and Olzak, S. (1982) 'Ethnic Mobilization in New and Old States: An Extension of the Competition Model', *Social Problems*, 30, 172-43.
- Nairn, T. (1996) 'Scotland and Europe', in G. Eley and R. Suny (ed.), *Becoming National: A Reader*, NY: Oxford University Press, 79-106.
- Nairn, T. (1997) *Faces of Nationalism: Janus Revisited*, London: Verso.
- Nairn, T. (2003 [1977]) *The Break-up of Britain*, 3rd edn, Australia: Common Ground Publishing.
- Nehru, Jawarhalal (1989) *The Discovery of India*, Oxford: Oxford University Press (first published in 1949).
- Nielsen, K. (1999) 'Cultural Nationalism, Neither Ethnic nor Civic', in R. Beiner (ed.), *Theorizing Nationalism*, NY: State University Press, 119-30.
- Nimni, E. (1991) *Marxism and Nationalism: Theoretical Origins of a Political Crisis*, London: Pluto.
- Novak, M. (1971) *The Rise of the Unmeltable Ethnics*, NY: Macmillan.
- Okamura, J. (1981) 'Situational ethnicity', *Ethnic and Racial Studies*, 4, 4, 452-65.
- O'Leary, B. (1996) 'On the Nature of Nationalism: An Appraisal of Ernest Gellner's Writings on Nationalism', in Hall, J. and I. Jarvie (eds.), *The Social Philosophy of Ernest Gellner*, Atlanta and Amsterdam: Rodopi, 71-112.
- Olzak, S. (1983) 'Contemporary Ethnic Mobilization', *Annual Review of Sociology*, 9, 355-74.
- Orridge, A. W. (1981a) 'Uneven Development and Nationalism ? 1', *Political Studies*, XXIX(1), 1-15.
- Orridge, A. W. (1981b) 'Uneven Development and Nationalism ? 1', *Political Studies*, XXIX(2), 181-190.
- Ozkirimli, O. (2003) 'The nation as an artichoke? A critique of ethnosymbolist interpretations of nationalism', *Nations and Nationalism*, 9(3), 339-55.
- Ozkirimli, U. (2000) *Theories of Nationalism*, NY: Palgrave.
- Ozkirimli, U. (2005) *Contemporary Debates on Nationalism: A Critical Engagement*, NY: Palgrave.
- Parsons, T. (1951) *The Social System*, Ill: Glencoe.
- Portes, A. et al. (1980) 'Assimilation or consciousness: Perceptions of U. S. society among recent Latin American immigrants to the United States', *Social Forces*, 59, 200-24.
- Potter, J. and Wetherell, M. (1987) *Discourse and Social Psychology*, London: Sage.
- Potter, J. Edwards, D. and Wetherell, M. (1993) 'A model of discourse in action', *American Behavioral Scientist*, 36, 383-401.

- Renan, E. 1990 (1882) 'What is a Nation?' (trans. by M. Thom), in H. Bhabha (ed.), *Nation and Narration*, London: Routledge, 8-22.
- Rogowski, R. (1985) 'Causes and varieties of nationalism: a rationalist account', in E. A. Tiryakian and R. Rogowski (eds.), *New Nationalisms of the Developed West*, Boston, MA: Allen & Unwin.
- Rokkan, S. (1970) *Citizens, Elections, and Parties*, NY: Rand McNally.
- Said, E. (1985) *Orientalism*, Harmondsworth: Penguin.
- Saussure, F. de (1974) *Course in General Linguistics*, London: Fontana
- Schopflin, G. (1995) 'Nationalism and Ethnicity in Europe, East and West', in C. A. Kupchan (ed.), *Nationalisms and Nationalities in the New Europe*, NY: Cornell University Press, 37-65.
- Schopflin, G. (1996) *Nationalism and Ethnic Minorities in Post-Communist Europe*, in R. Caplan & J. Feffer (eds.), *Europe's New Nationalism*, NY: Oxford University Press.
- Seton-Watson, H. (1977) *Nations and States*, Boulder: Blackwell.
- Seymour, M., J. Couture and K. Nielsen (1996) 'Introduction: Questioning the Ethnic/Civic Dichotomy', in J. Couture, K. Nielsen and M. Seymour (eds.), *Rethinking Nationalism*, Calgary, Alberta: University of Calgary Press, 1-61.
- Shils, E. (1957) 'Primordial, Personal, Sacred and Civil Ties', *British Journal of Sociology*, 8 (2), 130-45.
- Shils, E. (1995) 'Nation, nationality, nationalism and civil society', *Nations and Nationalism*, 1(1), 93-118.
- Smith, A. D. (1971) *Theories of Nationalism*, London: Gerald Duckworth & Company Limited.
- Smith, A. D. (1981) *The Ethnic Revival in the Modern World*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, A. D. (1983) 'Nationalism and Classical Social Theory', *British Journal of Sociology*, 34(1), 19-28. Also in *The Antiquity of Nations* (2004).
- Smith, A. D. (1986) *The Ethnic Origin of Nations*, Oxford: Blackwell.
- Smith, A. D. (1991) *National Identity*, Harmondsworth: Penguin.
- Smith, A. D. (1995) *Nations and Nationalism in a Global Era*, Cambridge: Polity Press.
- Smith, A. D. (1996) 'History and Modernity: Reflection on the Theory of Nationalism', in Hall, J. and I. Jarvie (eds.), *The Social Philosophy of Ernest Gellner*, Atlanta and Amsterdam: Rodopi, 129-46.
- Smith, A. D. (1998) *Nationalism and Modernism*, London: Routledge.
- Smith, A. D. (1999) *Myths and Memories of the Nation*, Oxford and New York: Oxford

- University Press.
- Smith, A. D. (2001) *Nationalism*, Cambridge: Polity Press.
- Smith, A. D. (2002) 'Dating the nation', in Eaniele Conversi (ed.), *Ethnonationalism and the Contemporary World: Walker Connor and the Study of Nationalism*, London: Routledge.
- Smith, A. D. (2003) *Chosen Peoples: Sacred Sources of National Identity*, Oxford: Oxford University Press.
- Smith, A. D. (2004) *The Antiquity of Nations*, Cambridge: Polity Press.
- Smith, A. D. (2005) 'The genealogy of nations: an ethno-symbolic approach' in Atsuko Ichijyo and Gordana Uzelac (eds.), *When is the Nation?*, London and New York: Routledge.
- Snyder, J. (1993) 'Nationalism and the Crisis of the Post-Soviet State', in M. E. Brown (ed.), *Ethnic conflict and international security*, NJ: Princeton University Press, 79-101.
- Spencer, J. (1990) 'Writing within: anthropology, nationalism and culture in Sri Lanka', *Current Anthropology*, 31, 283-91.
- Spencer, P. and Wollman, H. (2002) *Nationalism: A Critical Introduction*, London: Sage.
- Spicer, E. (1971) 'Persistent Identity System', *Science*, 174 (4011), 795-800.
- Stalin, J. (1994) 'The Nation', in J. Hutchinson and A. D. Smith (ed.), *Nationalism*, NY: Oxford University Press, 18-21.
- Stalin, J. (1995) 'Marxism and the National-Colonial Question', in O Dahbour and M. R. Ishay (ed.), *The Nationalism: Reader*, NJ: Humanities Press International, 192-98.
- Tamir, Y. (1993) *Liberal Nationalism*, Princeton: Princeton University Press.
- Tilley, V. (1997) 'The Terms of the Debate: Untangling Language about Ethnicity and Ethnic Movements', *Ethnic and Racial Studies*, 20(3), 497-522.
- Tilly, C. (1990) *Coercion, Capital, and European States, AD 990-1990*, Cambridge: Cambridge University Press.
- van den Berghe, P. (1978) 'Race and Ethnicity: A Sociobiological Perspective', *Ethnic and Racial Studies*, 1(4), 401-11.
- van den Berghe, P. (1981) *The Ethnic Phenomenon*, NY: Elsevier.
- van den Berghe, P. (2005) 'Ethnies and nations: Genealogy indeed', A. Ichijyo and G. Uzelac (ed.), *When is the Nation?*, London: Routledge, 113-24.
- Van Dijk, T.A. (ed.) (1985) *Handbook of Discourse Analysis*, vols.I-IV, London: Academic Press.
- Van Dijk, T.A. (ed.) (1997) *Discourse as Structure and Process*, London: Sage.

- Walby, S. (1996) 'Woman and Nation', in G. Balakrishnan (ed.), *Mapping the Nation*, London: Verso, 235-54.
- Wallerstein, I. (1987) 'The Construction of peoplehood: Racism, nationalism, ethnicity', *Sociological Forum* 2: 373-88.
- Waters, M. (1990) *Ethnic Options*, California: University of California Press.
- Waters, M. (2001) *Globalization*, London: Routledge.
- Weber, E. (1976) *Peasants into Frenchmen: the Modernization of Rural France 1870-1914*, Stanford, CA: Stanford University Press.
- Weber, M. (1954) *Max Weber on Law in Economy and Society*, MA: Harvard University Press (first published in German in 1921).
- Weber, M. (1994) 'The Nation', in J. Hutchinson and A. D. Smith (ed.), *Nationalism*, NY: Oxford University Press, 21-6.
- Weber, M. (1995) 'Economic Policy and the National Interest in Imperial Germany', in O Dahbour and M. R. Ishay (ed.), *The Nationalism: Reader*, NJ: Humanities Press International, 119-25.
- Wilson, E. O. (1975) *Sociobiology: The New Synthesis*, MA: Harvard University Press.
- Xenos, N. (1996) 'Civic Nationalism: Oxymoron?', *Critical Review*, 10 (2), 213-31.
- Yack, B. (1999) 'The Myth of the Civic Nation', in R. Beiner (ed.), *Theorizing Nationalism*, NY: State University of New York Press, 102-18.
- Yuval-Davis, N. (1997) *Gender and Nation*, London: Sage.
- Zernatto, G. (1944) 'Nation: The History of a Ward', *Review of Politics*, 6, 351-66.
- Zubaida, S. (1989) 'Nations: Old and New. Comments on Anthony D. Smith's "The Myth of the Modern Nation and the Myths of Nations"', *Ethnic and Racial Studies*, 12(3), 329-39.

日本語文献

- 麻生太郎 (2007) 『とてつもない日本』 新潮新書。
- 安部晋三 (2006) 『美しい国へ』 文春新書。
- 大澤真幸 (2007) 『ナショナリズムの由来』 講談社。
- 川田・大畠編 (2003) 『国際政治経済辞典』 東京書籍。
- 姜尚中 (2001) 『ナショナリズム』 岩波書店。
- 木内孝 (2000) 『ポストモダニズムの基礎』 踏青社。
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源』 新曜社。
- 佐藤成基 (2008) 『ナショナル・アイデンティティと領土』 新曜社。
- 塩川信明 (2008) 『民族とネーション—ナショナリズムという難問』 岩波新書。

- 関根政美 (1994) 『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会。
 野田又夫 (1970 [1963]) 『ルネサンスの思想家たち』岩波新書。
 橋川文三 (2005 [1968]) 『ナショナリズム』紀伊国屋書店。
 初瀬龍平編 (1996) 『エスニシティと多文化主義』同文館。
 深澤民司 (1999) 『フランスにおけるファシズムの形成』岩波書店。
 福田敏一 (2002 [1985]) 『政治学史』東京大学出版会。
 見田・栗原・田中編 (1990) 『社会学事典』弘文堂。
 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会。
 下村寅太郎 (1975) 『ルネサンスの人間像』岩波書店。

注

- (1) 例えば中国の少数民族は、中国語による学校教育により、その多くが中国語でコミュニケーションがとれる。中国ナショナリティの共有化が比較的に進んでいる満州族やモンゴル族に比べ、チベット族やチュルク系の人々（主にウイグル族）は中国ナショナリティの共有を拒み続けている。旧ユーゴスラビアでは、セルボ・クロアチア語を共有していたセルビア人とクロアチア人が、激しく対立してユーゴスラビア紛争に発展した。
- (2) 経済的アプローチは、マルクス主義の伝統を受け継ぐ I・ウォラーステイン (I. Wallerstein 1987) と M・ホロック (M. Hroch 1985) を加えることが可能である。又、政治的アプローチには、P・プラス (P. Brass 1991)、A・ギデンス (A. Giddens 1985)、M・マン (M. Mann 1995)、E・ホブズボーム (E. Hobsbawm 1983; 1990) らを加えることができる。当然のことながら、分類の仕方によっては、異なる論者が異なるアプローチに分類されることも可能である。例えば、A・D・スミスは、T・ネアンと M・ヘクターを社会経済的 (socio-economic)、E・ゲルナーを社会文化的 (socio-cultural)、A・ギデンス、J・ブルイリー、M・マンを政治的 (political)、E・ケドゥーリをイデオロギー的 (ideological)、そして E・ホブズボームと B・アンダーソンを構成主義的 (constructionist) というアプローチに分類している (A. D. Smith 2001: 47-8)。
- (3) E・ゲルナーの著作で最も多く引用されるのは、1983年の *Nations and Nationalism* である。ただし、E・ゲルナーのナショナリズム論の原型は、1964年の *Thought and Change* で既に示されていた。両著作は、E・ケドゥーリの *Nationalism* を多分に意識して書かれたものであり、教義としてのナショナリズムといったものの重要性を否定し、産業化のプロセスに由来するナショナリズム論を説いた。
- (4) 啓蒙主義はルネサンスと宗教改革の影響を受けていた。そしてルネサンスは古

代ギリシャの哲学、宗教改革は原始キリスト教の復興を掲げるという側面を有していた。その意味で、ナショナリズムの思想的ルーツは古代ギリシャの哲学とユダヤ教にあるとしたH・コーンの議論は、驚くべきものではない。また、L・グリーンフェルドの議論もルネサンスと宗教改革の影響を重視していることから、H・コーン同様、イデオロギーの重要性を説くものである。その意味で、E・ケドゥーリの議論と彼らのナショナリズム論はイデオロギーを重視する点で一致する。しかしE・ケドゥーリが19世紀初めのドイツに最初のナショナリズムの発生を見る一方、H・コーンとL・グリーンフェルドは共に最初のナショナリズムの発生をウェストファリア条約（1648年）以前のイングランドに求める。その違いは、E・ケドゥーリがナショナリズムを教義（一つの体系化された教え）として捉えている一方、H・コーンとL・グリーンフェルドはそれを必ずしも体系化されていないイデオロギー（世界観のような物事に対する包括的な思想）として捉えているということに由来すると考えられる。

- (5) ヨーロッパの外で最初にナショナリズムが伝播したのは、ギリシャであるという。E・ケドゥーリは、ギリシャ人ナショナリストのコラエス（Adamantios Koraes）（1748～1833）の活動を例にとり、ギリシャナショナリズムの発生を明らかにしようとしている（E. Kedourie 1970：37-8）。
- (6) 社会人類学の学位を取得したE・ゲルナーは、初期の研究活動において、必ずしもナショナリズムを主たる研究対象とはしていなかった。最初の著書 *Words and Things* (1959) は、言語哲学に関するものであったし、*Thought and Change* (1964) においても、ナショナリズムをまとまった形で取り上げていたのは第7章の Nationalism のみであった。
- (7) *Thought and Change* の中で批判されたE・ケドゥーリは、*Nationalism in Asia and Africa* (1970) の中で、E・ゲルナー理論の批判を展開した（E. Kedourie 1970：132-3）。そしてE・ゲルナーは、*Nations and Nationalism* (1983) の第9章全体を割いて、長々とE・ケドゥーリ批判を展開した。この「LSE 論争」は、E・ゲルナーを指導教官に学位を取得したA・D・スミスが後に加わった。LSE は、ASEN（the Association for the Study of Ethnicity and Nationalism）の母体でもあり、いわば、ナショナリズム研究のメッカである。J・ブルイリーやJ・ハッチンソンらもLSEに加わり、「LSE 論争」は引き継がれている。
- (8) 身分制度の強制と同意は、インドのカーストをはじめ、中世日本の士農工商など、世界中で確認できると思われる。
- (9) 産業化はナショナリズムを必要とする。なぜなら、ナショナリズムは産業化が要求する高文化を創り出し、保護する機能を果たすからである。このE・ゲルナ

一の機能主義 (functionalism) の問題は、後でも述べるが、こうである。産業化はナショナリズムを必要とするかもしれないが、必要だからといってそれを生じさせるかどうかは分からない。例えば、お金をためるには仕事を必要とするが、仕事をするかどうかは分からない。つまり、必要だからといって、それをするかどうかは分からない、ということである。ならば、産業化がナショナリズムを必要としても、ナショナリズムが生じるかどうかはわからない、ということである。従って、E・ゲルナーの機能主義に基づいて、ナショナリズムの由来を産業化に還元することは、論理的な飛躍だといえる。

- (10) 古典的マルクス主義 (例えばレーニン) は、ナショナリズムを、ブルジョワに対する労働者階級の、または、帝国に対する被植民地地域の、階級闘争の一形態であると考えた。T・ネアンのようなネオマルクス主義者らによるナショナリズム論は、資本主義の不均等な発展がナショナリズムの由来だと考えるに至り、E・ゲルナーの理論により近くなった。
- (11) E・ゲルナーに対する評価と批評に関しては、J. A. Hall and I. Jarvie (eds), *The Social Philosophy of Ernest Gellner*, Atlanta and Amsterdam: Rodopi, 1996、及び、J. A. Hall (ed.), *The State of the Nation: Ernest Gellner and the Theory of Nationalism*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998、が特に参考になる。
- (12) 近代主義の中で政治的アプローチを採用する代表的論者は、J・ブレイリーの他に、A・ギデンス、M・マン、P・プラス、C・ティリー、E・ホブズボーム、M・ヘクターらがいる。紙面上の制限もあり、比較的新しいM・ヘクターのナショナリズム論を次に扱うが、他の論者に関しては、関係してくる箇所で部分的に言及するに留めることにする。
- (13) この類型については、*Nationalism and the State* の9～14ページで詳しく述べられている。
- (14) この定義の中のネーションとは、文化的特性を有し、自治 (self-governance) を求める共同体 (エスニック集団) のことを指し、国家とは、領域的な境界を有するひとつの社会において、秩序、司法、社会福祉、そして安全保障などを提供する責任を負う、専門組織のことを指す (M. Hechter 2000 : 7)。
- (15) 統一 (irredentist) ナショナリズムについては、稀なケースだという理由でM・ヘクターは重要視していない。簡単に言うと、統一ナショナリズムは、同胞ナショナル集団が住んでいる隣国の領土を奪取し、自国の領土に組み込もうとする運動を指す。ところで、ネーションとその統治単位が既に一致していて、国際関係の中でその優位性と権力を増強させようとする運動は、愛国主義 (patriotism) だとする。だが、ネーションとその統治単位が完全に一致しているケースはほとんどなく、従って、愛国主義は稀で、通常はマルチナショナル国家の中の

- ある特定のネーションの優位性と権力を増強する、ナショナリズム運動となる。
- (16) 近代に入ってヨーロッパ列強が築き上げたアジア・アフリカ地域の植民地国家においても、間接支配は普遍的なものであったといえる。植民地国家は遠く離れた地に位置し、しかも少数の人員と限られた財政の中で秩序を保つには、現地の有力者に権限を委託して統治してもらう、間接統治の形態をとる以外に方策はなかったからである。M・ヘクターの理論に従えば、この間接統治のシステムが機能している限り、アジア・アフリカの植民地国家にナショナリズムは生じないことになる。
- (17) 近代国家システムに起因する国家間競争と軍事費の増加が、ナショナリズムの一大原因であると指摘している論者に、M・マンがいる。彼によれば、近代国家の軍事費と徴兵の拡大が民衆の政治参加を促し、そのことが民衆運動としてのナショナリズムとネーションの誕生につながった、という (M. Mann 1995 : 48-51)。
- (18) デンマークとスウェーデンはフランスより1世紀前に直接支配の形態をとっていたという。しかし、両国は孤立状態にあったため、ヨーロッパ大陸における地政学の影響はほとんどなかった。従って、M・ヘクターは、間接支配から直接支配に移行し、最初に歴史的インパクトを与えたのは、フランスだと考える (M. Hechter 2000 : 176)。イングランドもフランスより前に直接支配の形態をとっていたが、フランスのナショナリズムの方がより劇的な影響をヨーロッパ大陸に与えた、とM・ヘクターは考える (*ibid.* : 58-9)。
- (19) E・ホブズボームによれば、最古の国歌はイギリスで1740年に創られ、最古の国旗はフランスで1790—4年に創られたという (E. Hobsbawm 1983 : 7-14)。
- (20) M・ヘクターは、近代以前における日本が「文化的に均一であった」と主張するが、琉球や蝦夷については言及していない (M. Hechter 2000 : 184)。ドイツにしても、イタリアにしても、文化的に均一であったとはいえない。しかし、「比較的に文化的均一性が見られる領域」という意味で言えば、M・ヘクターの主張は妥当性を持つものと言えよう。
- (21) ところで、日本の場合は、ペリーの来航によって統合ナショナリズムが生じ、明治維新後には国家建造ナショナリズムに変化していった、ということになろう。統合ナショナリズムは外部からの刺激 (脅威に対する反動) によって生じるものである一方、国家建造ナショナリズムは国家内部における改革の必要性から生じる点で違いがある、とM・ヘクターは言う (M. Hechter 2000 : 91-2)。
- (22) 「近代主義の内部から寄せられる批判」は、所謂ポストモダニズム (postmodernism) からの批判を含む。A・D・スミスによれば、ポストモダニズムは、ナショナルアイデンティティの分裂 (fragmentation) と混成 (hybridity)、性

(gender)、グローバリゼーションなどをテーマにし、新しい角度からナショナリズムを分析しようとする。ポストモダニズムは、近代主義の主張の多くを受け入れた上で、その批判の中から新たな諸理論を展開していることから、近代主義パラダイムの延長線上に位置するアプローチだと言える。A・D・スミスは、H・バーバ、P・チャタジー、Y・デイヴィスらの名をポストモダニストとして挙げ、G・モッセ、P・シュレシンガー、D・カンディヨティ、R・ブルベイカー、M・ビリッグらの名をそのシンパとして挙げている (A. D. Smith 1998: 224)。

- (23) 当然のことながら、全ての近代主義者が純粋な構造主義的アプローチを採用しているところでは言っているわけではない。例えば、E・ケドゥーリのナショナリズム論は、近代主義でありながらも、人間の主観・間主観、イデオロギー、そしてその時々社会・文化的コンテキストを考慮している。又、J・ブレイリーの *Nationalism and the State* (1982) は、詳細な社会的コンテキストと政治プロセスを明らかにすることによって、構造主義的説明だけに頼らない、密度の高い歴史分析を行っている。
- (24) 民衆がネーションに対して忠誠心を抱くのは、歴史的エスニーがその基礎にあるからである、とA・D・スミスは考える。従って、A・D・スミスにとって、「高文化」は単なる「作り事」(an invention)ではなく、長い歴史の中で培われてきたエスニーの文化や伝統を、その基礎にしているものである。
- (25) M・ヘクターの「周辺ナショナリズム」の説明によれば、民衆の共鳴は「文化的分業」に由来する格差によって生じる。それは唯物的利益の追求という観点からの説明であり、先に述べたE・ゲルナーに対する批判と同様の批判が適応される。